東京都江戸東京博物館研究報告　第1号　1995年10月
Journal of Edo-Tokyo Studies, NO.1, P.157-194, October, 1995.

【論文】

浄土双六考

岩城紀子*

目次

はじめに
一、浄土双六の実態
(1) 先行研究の整理
(2) 文献史料にみる浄土双六
二、浄土双六の内容
(1) 現存する浄土双六
(2) 浄土双六の構成と特徴
おわりに

キーワード　双六　十界　遊戯　出世　浄土　曼陀羅

はじめに

現在の日本において、正月に絵双六をひろげる家庭はいったいどれほどあるだろう。少なくとも筆者が小学生であった昭和四十年代には、子供向け雑誌の正月付録の一つは双六であったように記憶している。しかし今ではもっぱら錦絵版画の一種として、あるいは風俗史の資料として、コレクターや博物館関係者の注目を集めるのみで、遊戯としての存在意義は失われてしまっているといっても過言ではないであろう。

かつて絵双六は正月の庶民の遊戯として欠かせない物であった。初春の町を「道中双六、おたから、おたから」との呼び声高く双六売りが振り歩き、絵草紙屋の店先には、各版元が競って出した新版の色鮮やかな絵双六が並べられた。木版多色刷の技術が向上し、錦絵の需要が増加するにつれ、絵双六もまた多様化し、その種類を増していった。そしてそこには当時の最新の流行や風俗が、情報としてふんだんに盛り込まれたのである。

従来絵双六を何らかの形で史料として扱う場合、そこに描かれた風俗的な情報に利用価値を見出していたことが多かったように思う。しかし、絵双六という遊戯の持つ特質を考えあわせると、そこから風俗的情報以外の情報を導き出すことが可能である、と筆者は考え

* 江戸東京博物館　学芸員

ている。なぜなら絵双六とは、複数のマスによって紙上に再現された一定の秩序に基づく世界の中を、遊戯者の代理であるコマが振り出しから到達点である上がりを目指して〝上昇移動〟していくことを競うゲームであるからだ。マスの配置や、その中を動くコマの移動経路をこまかく分析することによって、それぞれの時代の秩序観・価値観を掘りおこすことができるのである。

筆者は以前、こうした観点に立ち、数ある絵双六の中でも人の社会的地位の移動をテーマとしている「出世双六」をとりあげ、幕末から明治にかけての社会変動期における人々の出世観の変遷を追った。[1] 出世双六は〝地位〟という人間に付随する価値の移動をテーマに構成された双六であり、その舞台として描かれるのは、その双六の遊び手そのものが生活する現世である。振り出しから上がりまで、一枚の紙に凝縮された現世の中を、賽の目に従って移動するコマの動きは、まさに人生の縮図ともいえる。人々の出世観の変遷は、如実に出世双六の内容の変化となって現れるのである。

さて、そうした出世双六を含むすべての絵双六の日本に於ける起源とされているのが、浄土双六と呼ばれる双六である。この双六は、人間界を振り出しに、上は仏界、下は地獄界まで、仏教で説かれる十界を基本に画面が構成されており、いわば来世における人間の出世をテーマとしている双六である。そうした意味で、絵双六全体の起源といえるとともに、同じく人間に付随する価値の移動を主題としている点で、後に出世双六を派生させていく要素を強く内包していた双六であると考えられるのである。

本稿においては、今まであまり論じられることのなかった浄土双六に焦点をあて、出世双六の前身ともいえる浄土双六の実態と内容について、若干の私見をのべることとする。

一、浄土双六の実態

(1) 先行研究の整理

浄土双六に関する研究は、従来絵双六の歴史を述べる上において、その起源としての位置づけで述べられることが多く、浄土双六そのものを対象とした研究はほとんど行われていないのが現状であろう。

絵双六の歴史についてのある程度まとまった初期の論考として挙げられるのは、有馬敏四郎「遊戯」中の「雙六」の項である。[2] 氏は帝室博物館に所蔵されていた「六八種程」の絵双六[3]を検討対象とし、絵双六の大系化を試みているが、その中で浄土双六について次のような説明を加えている。

まず浄土双六の前段階として、天台の名目を集め初学の僧や児童に遊びながら覚えさせる一種の仏教布教の目的で作られた仏法双六（別名名目双六）が存在した。この双六は、文字だけで構成された文字双六であり、やがて娯楽性を増すために絵が加えられ成立したのが浄土双六であった。浄土双六は、一名永沈双六ともいわれ、貞享から享保期にかけての文芸作品によくその名が登場することから、このころ流行したもの、としている。

この他初期の先行研究としては、小高吉三郎『日本の遊戯』[4]での

「じゃうどすごろく」の項があるが、ここで述べられている説もほぼ同様のものである。

こうした、名目双六と呼ばれる文字だけで構成された仏法双六が絵双六の前段階として存在し、娯楽性を増すために絵が加えられ生まれたのが浄土双六であり、それが絵双六の起源である、という説は、実は文政九年（一八二六）に版行された柳亭種彦の考証随筆『還魂紙料』においてすでに述べられており、先に紹介した二氏もこの書によっている。[5]

種彦はこの著作において「浄土双六　附治良双六、冶良紋楊枝、道中双六」の項を設け、絵双六に関するかなり詳細な考証を行っており、項目名の筆頭にあることからもわかるように、特に浄土双六について多くの紙数をさいている。ここで多少長くなるが、種彦によって述べられている浄土双六の起源に関する部分を引用しておこう。

> 此双六の起に種々の説あり。まづ漢土に選仏図といふ物あり。それを写し、物といへり。長胤が〔名物六帖〕に五雑組を引て、選仏図と仮字を附たり。まへに載せし〔潜蔵子〕も、此説によりて選仏図の字を用いし歟。又一説、往古より名目双六といふ物あり。〔頭註〕名目双六は天台の名目を集しものにて絵双六にはあらず、今も印行の物ありて仏法双六といふ。是は初学の僧に天台の名目を覚させん為に作る物にて、弘安中の或書に未学の僧を罵る詞に、名目双六も知らずやといふことありとぞ。是を絵双六にひきなほし、が起なりとも云ふ。又異説、昔熊野比丘尼が地獄極楽の絵巻をひらき、婦女子に投華させて絵説せしに思ひよせて製しとも伝聞り。〔割註〕おそらくは選仏図に起るといふ説是ならん歟。[6]

また、種彦は万治・寛文年間から享保期にかけて成立した文芸作品から、浄土双六の名が見えるものを多く紹介し、当該期の流行を示唆している。さらに、当時すでに古板とされていた浄土双六三点が、葛飾北斎の模写により掲載されており、文政期の浄土双六の遺本を知るうえでも貴重な情報を提供している。

このように浄土双六に関する多くの資・史料が紹介され、その歴史について簡潔にまとめられたこの書物は、おそらく絵双六を研究する者にとって非常に便利なものであったのだろう。種彦の説は、ほぼ無批判に引用され、浄土双六に関する定説として定着していった感がある。

七十年代以降、錦絵の一分野として絵双六に対する関心は徐々に高まり、『日本絵双六集成』をはじめとする数冊の画集[7]が刊行されたが、そこに附されている解説で述べられている浄土双六に関する事項も、種彦の説を基本としている。浄土双六についての研究は、種彦以後ほとんど変化することなく、現在に到っているといってよいであろう。なおかつ冒頭で述べたように、従来の研究では、浄土双六の起源や成立の年代に多くの関心が向けられており、どのような人がどういった時にこの双六で遊んだのか、またそもそも浄土双六とはどのような形態・内容のものであったのか、といった浄土双六をめぐる実態について論及しているものはほとんどない。

次節では、こうした先行研究の問題点をふまえた上で、まず文献史料から確認できる浄土双六の実態について述べることとする。

(2) 文献史料にみる浄土双六

浄土双六の名は、一四〇〇年代後半から文献上に現れてくる。『御湯殿の上の日記』の文明十年（一四七八）二月十六日の条には次のように記されている。

御ちふつたうにて。しやうとすく六あそはす。佛うちたらん人をしやうくわんあるへしとさためらるゝ。すけ殿。二てう殿。左少弁佛。御所さま佛のそはうたせおはします。こんすけ殿□□□□□たうほさつ。宮の御かた。上らふ。ひんかしの御かたてんしやう。ふしみとの。御あちや〳〵。やふさいしやう中将ちこく。[8]

持仏堂において、後土御門天皇、公卿、女官らが浄土双六で遊んだことの記録であり、「佛うちたらん人をしやうくわんあるへしとさためらるゝ」とあることから、最上段の仏のマスに達した者に褒美を与えることになっていたようだ。翌十七日の条に「よへの御せうふ御ちやのこ五いろ御てんしん御すゝりのふたに入。御ちふつたうにて御しやうくわんあり」[9]という記述があり、実際に菓子がふるまわれた様子を伝えている。八年後の文明十八年（一四八六）二月十五日の条にも「しやうとすくろくみな〳〵うたせらるゝ」[10]とあり、浄土双六の名が登場している。またこれより前、『言國卿記』の文明六年（一四七四）八月八日の条には「一、宮御方ニテ、浄土シユコ六アソハサル、予モ御人數也、」という記述があり、翌年の六月二六日の項にも同様の記述が見られる。[11]『實隆公記』には文明六年（一四七四）八月十二日の記として「計女房奉書到来、浄土双六可寫進上之由也、則令書寫令持参了」[12]という記述があり、三條西實隆が後土御門天皇の希望により浄土双六を写し進上するよう命ぜられたことを知ることができる。この記述は『言國卿記』の同日の「一、予ウケタマハリ、權左方へ浄土シユコ六ノサイヲ（ママ）ノ名号ヲホラせ了、」[13]という記述と呼応しているものと考えられ、どの様な経緯からか詳細は不明であるが、後土御門天皇が浄土双六に関心を持ち、三條西實隆や山科言國といった周囲の人間に浄土双六とその賽を用意させたということを示していると考えられる。管見のかぎりにおいて、この前後の時期、後土御門天皇以外の天皇の時代に宮中で浄土双六が遊ばれたという史料は見当たらない。この時期に浄土双六の名がたびたび登場するということは、後土御門天皇の個人的な関心に支えられたもので、宮中の遊戯として一般化されていたとは考えにくいが、少なくとも以上の史料により文明年間にはすでに、浄土双六が存在し宮中という上層社会に伝播していたという事実は確認しうるだろう。

浄土双六の名が頻繁に文献に見られるようになるのは、江戸時代に入ってから、特に万治・寛文年間以降である。寛文から元禄期にかけて版行された書籍目録には、本文末尾の別表に掲げたように浄土双六の名が記載されている。[14]特に寛文十年（一六七〇）に版行された『増補書籍目録　作者付大意』の「掛物」の項には、「浄土双六」

とともに「懐中図」として「京　江戸　年代記　大坂　世界　近江八景　道中　日本　浄土双六」の九点を挙げており、[15] 種彦の指摘のとおりポケット版ともいえる小型の浄土双六が版行されていたことが推察される。

またこのころには、俳諧や浮世草子にも浄土双六が登場している。万治・寛文年間（一六五八～七二）に出された俳諧書には、例えば次のように浄土双六を題材とした句がいくつか見うけられる。

万治三年（一六六〇）成立　『新続犬筑波集』[16]
前句　ひとをこひ目もあやなすころく　　重信
附句　絵をみても浄土のさまぞねかはしき

寛文二年（一六六二）刊　『雀子集』[17]
発句　こひねかふ浄土すころくや諸仏名　　木上正次

寛文十一年（一六七一）刊　『続独吟集』
前句　月は浄土の道びきやせん　　玖也
附句　双六をながき夜すがら打あかし　　同

寛文十二年（一六七二）成立　『俳諧時勢粧』
前句　南の岸ぞすゞしき浄土　　維舟
附句　双六をうつゝなの身や月の下　　同

浮世草子の創始者である井原西鶴の作品にも浄土双六は登場する。西鶴は大坂の町人であり、遊里や商業の場を舞台とし、そこに生きる町人の姿を、同じ町人の立場から描いた作品を残した。『諸艶大鑑』（『好色二代男』）は京・大坂・江戸の三都をはじめ、全国各地の遊廓を舞台とし、そこで起こる人間模様を各遊廓の紹介・案内を兼ねつつ描いた作品であるが、その中で江戸の吉原遊廓の散茶見世での遊び方を説明している部分に浄土双六が出てくる。

是がならずば。それ〳〵に。爰にもさん茶といふは。ふらぬと申心なり。近年の仕出し。弐丁目の玉屋兵庫屋。大津屋を是から見れば。揚女良にも。さのみおとらぬ姿を。一軒に五十人づゝも見せかけ。大かたは、哥謠ふて引ざるはなし。書物見るもやさし。菊の一枝に、詠め入も。心ありげにおもはる。或は手相撲又はなんこよぶもあり。火渡し糸どり。浄土双六。心に罪なくうかれあそぶを。目数寄にどれにても。一歩に定めて。たとへしるべなくても望ば。作配する男。二階へあげぬさきに。金子を請取。ちんともかんともいわせぬ事に。埒のあいたる事ぞかし。侘たる人の遊ひ所爰なるべし。[18]

（傍点筆者。以下特に注記のないものは筆者による）

散茶女郎は、寛文八年（一六六八）三月、江戸府内の〝隠売女〟を捕らえ刑罰として吉原に送り、堺町・伏見町を設け営業させたものであり、散茶見世と称した。従来より吉原にあった太夫見世と格子見世は統合されて太夫格子見世となり、散茶見世は太夫格子見世より格下に位置した。太夫・格子女郎のように客をふることもなく、

費用も太夫・格子女郎のそれぞれ三十七匁・二十五匁に対し十五匁と安く遊べる見世であった。[19] 貞享元年（一六八四）に版行された『諸艶大鑑』にこうした場面が描かれていることは、吉原という空間で下級の遊女が浄土双六で遊んでいてもさして違和感を生まない状況であったがゆえであろう。

以上のように、浄土双六は万治・寛文年間から貞享頃にかけて、俳諧や浮世草子といった大衆文芸の中に登場してくるが、このことは浄土双六がそうした文学の担い手であり受容層でもあった庶民に認知され、普及していたことを示している。文明年間に宮中で遊ばれていた浄土双六がこの時期庶民の遊びとして文献上に登場したわけだが、この間約二百年間浄土双六に関する記述が皆無と言ってよく、どのような経緯でここに庶民の遊びとして再登場したのか残念ながら明確にすることはできない。ただ、これ以降、浄土双六に限らず道中双六等その他の絵双六の遊び手として文献上に登場するのはほとんど庶民に限られており、万治・寛文期以降庶民の遊戯として定着したことは確かである。[20]

では実際に浄土双六はどのような時に遊ばれていたのか、次にこの点について考えてみたい。

現在、絵双六と言えば正月に遊ばれる物というイメージが支配的であろう。しかし最初から正月の遊びであったわけではない。浄土双六に関して記された文献史料を見ていくと、日待月待行事、特に秋の月夜と関連する時に遊ばれていたことを示すものが出てくる。

延宝五年（一六七七）頃に脱稿したと言われる黒川道祐の『日次紀事』には次のような記述がある。

凡良賤正・五・九月涓吉日、主人齋戒沐浴。自暮至朝、不少寝。其間親戚朋友聚其家、雑遊令醒主人睡。或倩僧侶・陰陽師、令誦経咒。待朝日出而献供物、祈所願。是謂日待。或三日、十七夜・廿三夜・廿十七夜、有月待。其式粗同。凡日待之遊戯、高貴家有管弦・拍子・十炷香・競者香・具合（ママ）・双陸・囲碁・将棊等遊楽、或詩歌・連歌・加留多・十種茶・十種酒、或謡謳・舞曲・琵琶法師平家談等之逸興。若民間則浄瑠璃・説経・狂言・歌念仏・三美線、或作三絃。一重切・尺八・浄土双陸・加留多・枕引・手相撲・頚引・腕推・髄推・居相撲・力持・福引・賦引（ホヒキ）、或繋縄於両人之脚互引之。是謂透逃子（ヨロホウシ）。凡百般戯楽無不為之。[21]

（ふり仮名は原典のまま）

つまり正・五・九月の吉日に行われる日待行事、或いは三日、十七日、二十三日、二十七日の夜に行われる月待行事の際に、民間においては種々の遊戯とともに「浄土双陸」すなわち浄土双六が遊ばれる、ということである。浄土双六が、この時代には「高貴家」の遊戯中に含まれておらず、民間の遊戯として挙げられていることは、前述したように浄土双六の庶民への普及を示しているといえよう。

また元禄十一年（一六九八）に版行された笑話集である『初音草噺大鑑』には、「百味の夜食浄土双六」と題された次のような小話が収められている。

天の岩戸のそのかみ、神すゞしめの風俗とて、九月の比日待をせしに、明難き夜のなくさみとて、小歌・浄瑠璃・物真似な

ど、さま〳〵なる中に、人の心の善悪は、これで見ゆる物ぢやと、浄土双六をうちけるに、やうちんへおつるも有り、餓鬼道へゆくも有、一人は仏になりたるとて、よろこぶ所へ、「御膳を出します」といへば、おの〳〵座敷をつくる。仏をうちたる者、「おれは仏の居所へなほる」とて、上座をしめければ、口がしこき者のいふやう、「それならば、まづ喰ものは餓鬼道でしまひまする」と申て、ほとけには何もくはせぬ。[22]

この他にも、日待・月待行事と確定はできないが、先に紹介した俳句の中にも浄土双六と月との関連性を示唆する句が数点見受けられる。例えば「月は浄土の道びきやせん　双六をながき夜すがら打あかし」の句は、「百味の夜食浄土双六」で描かれている日待と同様の状況をうつしたものであろうし、また「双六をうつゝなの身や月の下」「もみぢや月や浄土すごろく」といった、月と結び付けて詠まれている句もある。

通説によれば、特定の日に同信者が集まってお籠もりをし、眠らずに日の出を待って太陽を拝するのが日待行事であり、月の出を待って月を拝むのが月待行事であるとされている。その起源や性格については諸説あるが、[23]ともかく何らかの信仰に基づいて結成された講に属する講員らが一定の日に行う宗教行事である。行事の前に潔斎をし、頭屋など特定の場所に集まり、眠らずに一夜を過ごし、その間飲食や様々な遊興が行われることを特徴としている。江戸時代には、庶民の間でかなり一般的に行われていた行事であり、後には宗教的な性格が薄れ、遊興の部分のみを残すこととなった。[24]当時、日待・月待行事は信仰を介して複数の人間が一か所に集まる機会を提供しており、複数の遊び手を必要とする浄土双六もそうした場に適応した遊戯であったのだろう。

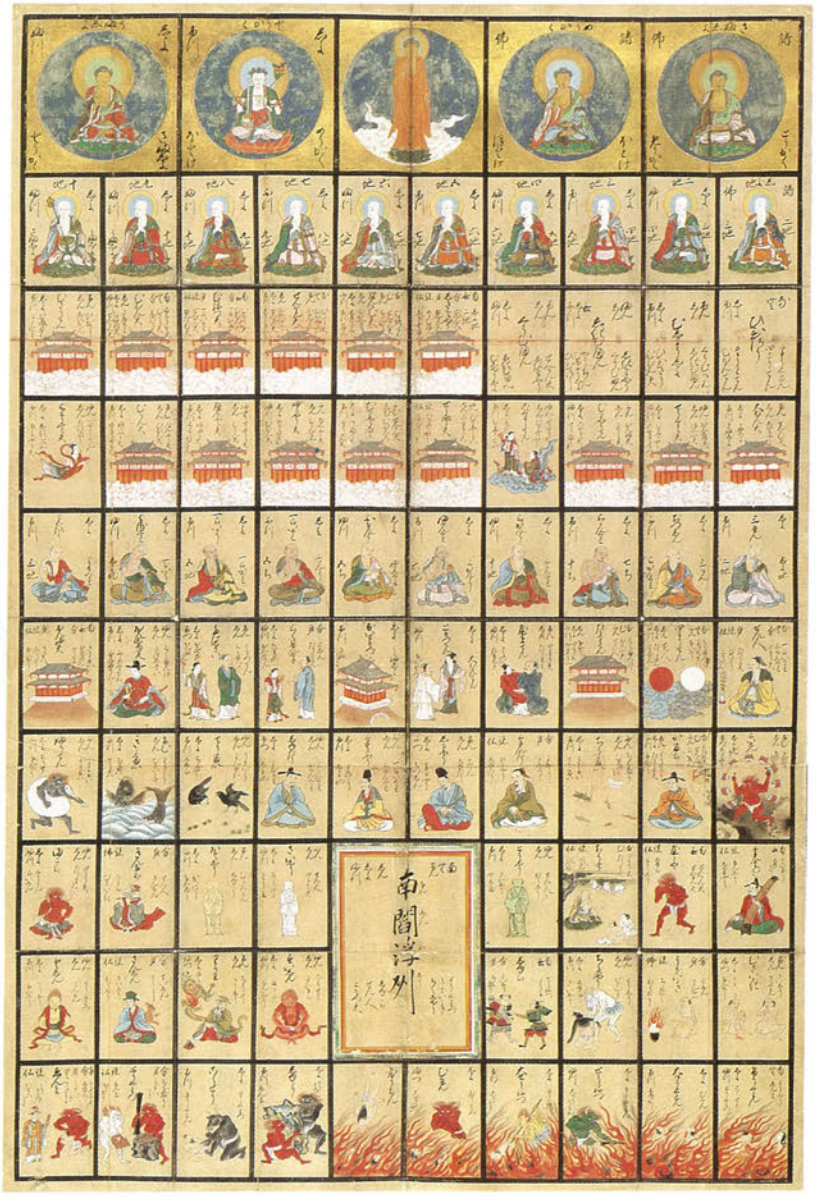
このように限られた史料から推察すると、浄土双六は万治・寛文年間には庶民を遊び手として、特に日待・月待行事の際の遊びとして定着し普及していたと言うことができる。しかし浄土双六はこの頃が流行の最盛期であったようで、享保年間を境にその名は文献上から姿を消していく。寛延年間に著されたと言われている『異説まちまち』には、著者が自らの幼少期を回顧して次のように述べている部分がある。

予幼少の時、父の許へ高野より来れる浄土双六有。（中略）今世此類の双六すたりたるにや。幼年の者の翫ぶを見ず。[25]

著者の和田烏江は関宿藩士であるが、伝記は未詳である。従って「予幼少の時」が著作より何年前のことになるのか、正確に知ることはできないが、貞享から享保の間と考えてほぼ間違いないであろう。ともかくこの本が書かれた寛延年間には浄土双六はもう見られなくなっていたようである。以後種々の文献に見える絵双六の記述はほとんど道中双六に関するものであり、絵双六の主流が浄土双六から道中双六に移ったことを物語っている。

以上、非常に不完全ではあるが残された文献史料から判明するかぎりにおいて浄土双六の遊戯としての実態について述べてみた。万治・寛文年間以前に浄土双六がどの様な形で存在していたのか、筆者が今までに確認した史料の範囲からは、ある時期宮中で遊ばれて

〔図版　No.1〕



資 料 名：東博本　浄土双六（ジョウドスゴロク）
作 者 名：不　明
制作年代：不　明
技　　法：紙本著色
法　　量：タテ；122.4cm　ヨコ；82.6cm
所　　蔵：東京国立博物館

<table>
<tr><td colspan="2">諸　とうかく
さふしよ
仏　めうかく</td><td colspan="2">諸　ほとけ
めうかく
仏　ほとけ</td><td colspan="2">［仏］</td><td colspan="2">しよ　めうかく
とうかく
ふつ　ほとけ</td><td colspan="2">しよ　さふしよ
うふしよ
ふつ　とうかく</td></tr>
<tr><td>諸　二地
しよ地
仏　三地</td><td>しよ　三地
二地
ふつ　四地</td><td>しよ　四地
三地
ふつ　五地</td><td>しよ　五地
四地
ふつ　六地</td><td>しよ　六地
五地
ふつ　七地</td><td>しよ　七地
六地
ふつ　八地</td><td>しよ　八地
七地
ふつ　九地</td><td>しよ　九地
八地
ふつ　十地</td><td>しよ　十地
九地
ふつ　うふしよ</td><td>しよ　うふしよ
十地
ふつ　さふしよ</td></tr>
<tr><td>南　けうくわん
無　四わうてん
ひつさう
しよ　たういてん
ふつ　むほんてん</td><td>ふん　くうむへん
しん　しきむへん
むしやうしよ
しよ　ひひさう
ふつ　むほん天</td><td>ふん　しきくきやう
しん　くうむへん
しきむへん
無　やうちん
しよ　むしやうしよ
ふつ　ひひさつ</td><td>なん　せんけん天
しん　しきくきやう
くうむへん
しよ　しきむへん
ふつ　むしやうしよ</td><td>南　しよ地
無　二地
分　せんけん天
しきくきやう
身　せんげん天
諸　くうむへん
仏　しきむへん</td><td>南　むねつてん
なむ　せんげん天
ふん　らかんかう
せんけん天
しん　らかんくわ
しよ　しきくきゆう
ふつ　しきむへん</td><td>南　むさう天
無　むほんてん
ふん　ふけんかう
せんげん天
しん　ふけんくわ
しよ　せんけん天
ふつ　しきくきやう天</td><td>南　むさう天
無　むほん天
分　一らいかう
むねつ天
身　一らいくわ
諸　せんげん天
仏　せんけん天</td><td>南　くわうくわ天
無　むさう天
分　よるかう
むほん天
しん　よるくわ
しよ　むねつ天
ふつ　せんげん天</td><td>なん　ひひさう
しん　しきむへん
むさうてん
しよ　むしやうしよ
ふつ　らかんくわ</td></tr>
<tr><td>なん　せんけん天
しん　しきしきやう
大ほん天
しよ　うふしよ
ふつ　さふしよ</td><td>ふん　ほんしゆ天
しん　ほんふ天
せうくわう天
しよ　むりやうしやう
ふつ　せうしやう天</td><td>ふん　ほんふ天
しん　こくわう天
むりやう天
しん　こうわう天
ふつ　せうしやう天</td><td>ふん　せうくわう天
しん　むりやうしやう
こくわう天
しよ　[illegible]
ふつ　むりやう天</td><td>ふん　むりやうてん
しん　こくわう天
せうしやう天
諸　ひりやうしやう
仏　へんしやう天</td><td>なん　せんけん天
しん　むほん天
むりやうしやう
しよ　ふくしやう天
ふつ　くわうくわ天</td><td>ふん　へんしやう天
しん　むうんてん
ふくしやう天
しよ　くわうくわ天
ふつ　むほん天</td><td>ふつ　せうくわう天
しん　むうん天
へんしやう天
しよ　ふくしやう天
ふつ　くわうくわ天</td><td>なん　へんしやう天
しん　むほん天
むうん天
しよ　ふくしやう天
ふつ　くわうくわ天</td><td>ふん　むさうてん
しん　しききやう
くわうくわ天
しよ　しきむへん
ふつ　ふくしやう天</td></tr>
<tr><td>しよ　しよ天
三けん
ふつ　二地</td><td>しよ　三けん
ぢつしん
ふつ　らやんくわ</td><td>しよ　七地
らかんくわ
ふつ　十地</td><td>しよ　らかんくわ
らかんかう
ふつ　十地</td><td>しよ　らかんかう
ふけんくわ
ふつ　六地</td><td>しよ　ふけんくわ
ふけんかう
ふつ　五ち</td><td>しよ　ふけんかう
一らいくわ
ふつ　五ち</td><td>しよ　一らいくわ
一らいかう
ふつ　五地</td><td>しよ　一らいくわう
よるくわ
ふつ　しよ地</td><td>しよ　よるくわ
よるかう
ふつ　三地</td></tr>
<tr><td>南　一らいくわ
無　ふけんくわ
分　四わう天
せん人
身　たうり天
諸　ひひさう
仏　とそつ天</td><td>南　らくへんけ
無　たけしさい
ふん　なんしう
四わうてん
しん　せん人
しよ　たうりてん
ふつ　としん</td><td>南　らくへんけ
む　ほんふ天
ふん　せん人
たうりてん
しん　なんしう
しよ　四わう天
ふつ　やまてん</td><td>なん　四わう天
しん　たうり天
やま天
しよ　ともつてん
ふつ　たけしさい</td><td>諸　大ほん天
とそつ天
仏　ない　[illegible]</td><td>しよ　うふしよ
ない
ふつ　さふしよ</td><td>分　としん
身　たうりてん
らくへんけ
しよ　たけしさい
ふつ　ほんふてん</td><td>なん　とそつてん
しん　らくへんけ
たけしさい
しよ　ほんしゆ天
ふつ　ほんふ天</td><td>ふん　らくへんけ
しん　たけしさい
ほんしゆ天
しよ　ふくしやうてん
ふつ　ほんふてん</td><td>南　ぎよるい
無　ほんしゆてん
分　ふうてん
ほんふ天
身　てうるい
諸　ちうう
仏　なんしう</td></tr>
<tr><td>なん　けんたう
しん　しゆたつ
らいしん
しよ　なんしう
ふつ　しりやう</td><td>南　たけしさい
無　せんにん
ふん　らいしん
かるら
身　せうくわう
諸　たうり天
ふつ　なんしう</td><td>なん　ちくしやう
しん　むさいかき
ちうるい
しよ　きよるい
ふつ　てうるい</td><td>分　よるかう
身　よるくわ
けんたう
諸　けきやう
仏　しゆたう</td><td>なん　三けん
しん　しゆたう
しりやう
しよ　けきやう
ふつ　ちつしん</td><td>なん　一らいくわ
しん　ふけんくわ
けきやう
しよ　よるかう
ふつ　しよ地</td><td>ふん　らかんくわ
しん　ふけんくわ
しゆたう
しよ　よるくわ
ふつ　しよ地</td><td>ふん　うさいかき
しん　さんけん
てうるい
しよ　らくしやう
ふつ　しゆら</td><td>なん　りうわう
しん　むさいかき
ぎよ類
しよ　ちうるい
ふつ　てうるい</td><td>なん　ぎよるい
しん　てうるい
ふう天
しよ　ちうう
ふつ　なんしう</td></tr>
<tr><td>南　けんたつ
無　しゆたつ
けんたつは
諸　なんしう
仏　しりやう</td><td>南　せんげん天
無　せんけん天
やしや
諸　しゆら
仏　とうしう</td><td>南　四わう天
無　たうり天
ちうう
諸　けうくわん
仏　けんたつは</td><td>ふん　せん人
しん　ほくしう
とうしう
しよ　さいしう
ふつ　やしや</td><td colspan="2" rowspan="2">南(なん)閻(えん)浮(ふ)州(しゆう)
南　とうくわつ
無　うさいかき
ふん　ちくしやう
しん　しゆら
しよ　せん人
ふつ　とそつ天</td><td>分　せん人
身　四わう天
さいしう
しよ　ちうう
ふつ　りう王</td><td>なん　むうんてん
しん　しゆかう
ほくしう
しよ　ひひさう
ふつ　なんしう</td><td>分　せん人
身　さんしん
きんなら
諸　さいしう
仏　ほくしう</td><td>ふん　四わう天
しん　たうり天
まこら
しよ　ふうてん
ふつ　らいしん</td></tr>
<tr><td>なん　さいしう
しん　けうくわん
むさいかき
しよ　うさいかき
ふつ　なんしう</td><td>分　としん
身　さんしん
うざいかき
諸　ちくしやう
仏　ほくしう</td><td>ふん　とうしう
しん　むさいかき
ちくしやう
しよ　しゆら
仏　さいしう</td><td>南　せうねつ
無　りう王
しゆら
分　さいしう
身　ちくしやう</td><td>ふん　こくせう
しん　きんなら
すいしん
しよ　まこら
ふつ　なんしう</td><td>なん　ちうう
しん　とうしう
りう王
しよ　まこら
ふつ　なんしう</td><td>分　すいしん
身　りうわう
さいしん
諸　さいしう
仏　ほくしう</td><td>ふん　とうくわつ
しん　さんしん
としん
しよ　とうしう
ふつ　なんしう</td></tr>
<tr><td>南　とうしう
無　えんま
けうくわん
しよ　こくせう
ふつ　とうくわつ</td><td>しよ　むけん
大けうくわん
ふつ　しゆかう</td><td>しよ　けうくわん
せうねつ
ふつ　大けうくわん</td><td>しよ　せうねつ
大せうねつ
ふつ　大けつくわん</td><td>しよ　やうちん
むけん
ふつ　大せうねつ</td><td>やうちん</td><td>しよ　とうくわつ
しゆかう
ふつ　えんま</td><td>しよ　とうくわつ
こくせう
ふつ　けうくわん</td><td>分　ちくしやう
身　うさいかき
とうくわつ
諸　えんま
仏　ほくしう</td><td>南　うふしよ
分　しゆう
無　さふしよ
えんま
諸　とうくわつ
仏　むさいかき</td></tr>
</table>

※ □ は難読箇所

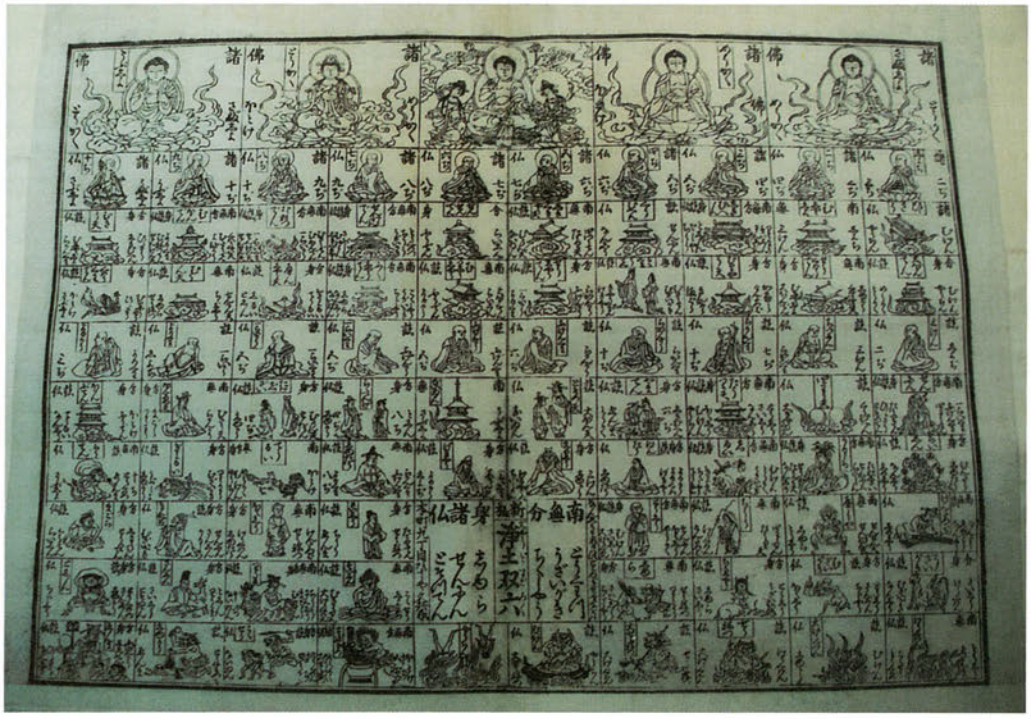
岩城　紀子

〔図版　No.2〕

資 料 名：十界雙六（ジッカイスゴロク）
作 者 名：不　明
版 元 名：不　明
制作年代：不　明
技　　法：木版墨刷　彩色
法　　量：タテ；117.0cm　ヨコ；65.3cm
所　　蔵：大東急記念文庫

右ふしょ 諸 左ふしょ 仏 等覚		等覚 諸 妙覚 仏 仏		[仏]		妙覚 諸 仏 仏 仏		左ふしょ 諸 等覚 仏 妙覚	
十地 諸 右ふしょ 仏 左ふしょ	九地 諸 十地 仏 右ふしょ	八地 諸 九地 仏 十地	七地 諸 九地 仏 十地	六地 諸 七地 仏 八地	五地 諸 六地 仏 七地	四地 諸 五地 仏 六地	三地 しょ 四地 仏 五地	二地 諸 三地 仏 四地	初地 諸 二地 仏 三地
むさう天 分 ひひさう 身 しきむへん 諸 むしゃうしょ 仏 らかんくわ	むほん天 南 くわうくわ天 無 むさう天 分 よるかう 身 よるくわ 諸 むねつ天 仏 せんげん天	むねつ天 南 むさう天 無 むほん天 分 一らいかう 身 一らいくわ 諸 せんげん天 仏 せんけん天	せんげん天 南 とうくわつ 無 ちうう 分 うさいかき 身 さんふしょ 諸 むけん 仏 しきくきやう天	せんけん天 分 らいしん 身 風てん	しきくきやう天 南 四わう天 無 たうり天 諸 むうん天 仏 ないほん	くうむへん 諸 せんにん 仏 南しう	しきむへん 南 けうわう 無 すいしん 分 さんしん 身 としん 諸 やしや 仏 ちうう	むしゃうしょ 南 初地 無 三けん	ひひさう 諸 むけん 仏 やうちん
くわうくわ天 分 むりやうしゃう 身 ひひさう 諸 仏 仏 左ふしょ	むうん天 南 せんけん天 無 ちくしゃう 諸 しゅら 仏 せうねつ	へんしゃう天 分 きょるい 身 鳥るい 諸 虫るい 仏 としん	ふくしやう天 南 こくしゃう 無 うさいかき 分 ちくしゃう 無 しゅら 諸 南しう 仏 ないほん	むりやう天 分 大ほん天 無 らいしん 諸 ふうてん 仏 よるかう	せうしゃう天 分 らんかう 身 ふけんかう 諸 一らいかう 仏 よるくわ	こくくわう天 南 むさうてん 無 むさいかき 諸 きゃうくわん 仏 けきゅう	むりやう天 諸 きんなら 仏 まこら 分 かるら 身 けんたつは	せうくわう天 南 しゅかう 無 くわうくわ天 分 むしやうしょ 身 大ほん天	大ほん天 分 むけん 身 やうちん 諸 めうかく 仏 とくかく
よるかう 諸 よるくわ 仏 三地	よるくわ 諸 一らいくわう 仏 初地	一らいかう 諸 一らいくわ 仏 五地	一らいくわ 諸 ふけんかう 仏 五地	ふけんかう 諸 ふけんくわ 仏 五地	ふけんくわ 諸 らかんかう 仏 六地	らかんかう 諸 らかんくわ 仏 十地	らかんくわ 諸 七地 仏 十地	ちっしん 諸 三けん 仏 らやんくわ	三けん 諸 初地 仏 二地
ほんふ天 分 仏 身 風てん 諸 鳥類 仏 南しう	ほんしゅ天 南 むさう天 東 らかんかう 分 まこら 身 りうわう	たけしさい 分 むうん天 身 せんにん 諸 四地 仏 しゅかう	らくへんけ 分 としん 身 八地 諸 四地 仏 しゅかう	ないほん 南 右ふしょ 無 左ふしょ	とそつ天 諸 大ほん天 仏 ないほん	やま天 分 しきむへん 身 六地 諸 えんま 仏 とうかく	たうりてん 南 東しう 無 西しう 分 南しう 身 北しう 諸 むけん 仏 やうちん	四わうてん 諸 くうむへん 仏 大けうくわん	せんにん 南 一らいくわ 無 ふけんくわ 分 四わう天 身 たうり天 諸 ひひさう 仏 とそつ天
風てん 南 十地 無 とうくわつ 諸 えんま 仏 左ふしょ	魚類 分 りうわう 身 むさいかき 諸 右ふしょ 仏 しゅかう	鳥類 南 仏 無 妙覚 分 むけん 身 やうちん	しゅたう 南 うかんくわ 無 ふけんくわ 諸 よるくわ 仏 八地	けきやう 分 一らいくわ 身 大けんくわん 諸 よるかう 仏 初地	しりゃう 分 三けん 身 しゅたう 諸 けきゃう 仏 らいしん	けんたう 分 よるかう 身 よるくわ 諸 けきゃう 仏 しゅたう	虫類 南 むけん 無 とうかく 分 うさいかき 身 きょるい 諸 ちくしゃう 仏 鳥類	かるら 南 たけしさい 無 せんにん 分 らいしん 身 せうくわう 諸 たうり天 仏 なんしう	らいしん 分 けんたう 身 しゅたつ 諸 なんしう 仏 しりゃう
まこら 分 しわう天 身 とうり天 諸 風てん 仏 らいしん	きんなら 分 せんにん 身 さんしん 諸 かるら 仏 むさいかき	北しう 南 けんたつは 無 せうねつ 分 きゃうくわん 身 しゅたう	西しう 分 たうり天 身 せうねつ 諸 ちうう 仏 えんま	南(なん)閻(えん)浮(ふ)州(しゅう) 南 とうくわつ 無 むさいかき ふん ちくしゃう 身 しゅら 諸 せんにん 仏 とそつてん		東しう 南 せんにん 無 北しう 分 めうかく 身 むけん 諸 西しう 仏 たけりくわん	ちうう 南 四わう天 無 たうり天 諸 けうくわん 仏 けんたつは	やしゃ 南 せんせん天 無 せんけん天 諸 しゅら 仏 東しう	けんたつは 南 けんたう 無 しゅたう 諸 なんしう 仏 しりやう
としん 分 とうくわつ 身 さんしん 諸 しゅかう 仏 ちくしゃう	さいしん 分 としん 身 りうわう 諸 西しう 仏 とそつ天	りうわう 南 ちうう 無 さんけん 分 まこら 身 むけん 諸 十地 仏 なんほん	すいしん 南 こくしゃう 無 初地 諸 むさうてん 仏 大きゃうくわん			しゅら 南 せうねつ 無 りうわう 分 西しう 身 ちくしゃう	ちくしゃう 分 東しう 身 うさいかき 諸 しゅら 仏 西しう	むさいかき 分 東しう 身 さんしん 諸 ちくしゃう 仏 北しう	うさいかき 分 西しう 身 けうくわん 諸 むさいかき 仏 なんしう
えんま 分 ふけんかう 身 しさひてん 諸 ひひさう 仏 南しう	しゅかう 南 仏 無 八地 分 三けん 身 四なう天 諸 南しう 仏 しゅら	こくせう 分 けうくわん 身 十地 諸 とうかく 仏 ないほん	とうくわつ 南 仏 無 十地 分 初地 身 とうかく 諸 めうかく 仏 大せうねつ	永沈	むけん 諸 やうちん 仏 大せうねつ	大せうねつ 諸 せうねつ 仏 大けうくわん	せうねつ 諸 けうくわん 仏 大けうくわん	大けうくわん 諸 むけん 仏 しゅかう	けうくわん 南 東しう 無 えんま 諸 こくせう 仏 とうくわつ

〔図版　No.3〕



資 料 名：新板浄土双六（シンバンジョウドスゴロク）
作 者 名：不　明
版 元 名：ひしや久兵衛／版
制作年代：不　明
技　　法：木版墨刷
法　　量：タテ；41.2cm　ヨコ；55.6cm
所　　蔵：東京国立博物館

諸 左ふしょ 右ふしょ 仏 等覚		諸 妙覚 等覚 仏 仏		［仏］		諸 仏 めうかく 仏 ほとけ		諸 とうかく さふしょ 仏 めうかく	
諸 右ふしょ 十地 仏 左ふしょ	諸 十地 九地 仏 右ふしょ	諸 九ぢ 八ぢ 仏 十ぢ	諸 八ぢ 七ぢ 仏 九ぢ	諸 七ぢ 六ぢ 仏 八ぢ	諸 六ぢ 五ぢ 仏 七ぢ	諸 五ぢ 四ぢ 仏 六ぢ	しょ 四ぢ 三ぢ 仏 五ぢ	諸 三ぢ 二ぢ 仏 四ぢ	諸 二ぢ しょぢ 仏 三ぢ
分 ひひさう 身 しきむへん むさう天 諸 むしゃうしょ 仏 らかんくわ	南 くわうくわ天 無 むさうでん 分 よるかう むほんでん 身 よるくわ 諸 むねつでん 仏 せんげん天	南 むさうでん 無 むほんでん 分 一らいかう むねつでん 身 一らいくわ 諸 せんげん天 仏 せんせん天	南 とうくわつ 無 ちうう 分 うざいかき せんげんてん 身 さぶしょ 諸 むけん 仏 しきくきやう天	分 らいしん せんせん天 身 ふうでん	南 四わう天 無 たうり天 しきくきやう天 諸 むうん天 仏 ないほん	諸 せんにん くうむへん 仏 なんしう	南 けうわう 無 すいしん 分 さんしん しきむへん 身 としん 諸 やしや 仏 ちうう	南 初地 むしゃうしょ 無 三けん	諸 むけん ひひさう 仏 やうちん
分 むりやうせう 身 ひひさう くわうくわ天 諸 ほとけ 仏 左ふしょ	南 せんけん天 無 ちくしゃう むうん天 諸 しゅら 仏 せうねつ	分 ぎょるい 身 てうるい へんしゃう天 諸 虫るい 仏 としん	南 こくしゃう 無 うざいがき 分 ちくしゃう ふくしやうでん 身 しゅら 諸 なんしう 仏 ないほん	分 大ほんてん 無 らいしん むりやうしゃう 諸 ふうてん 仏 よるかう	分 らんかう 身 ふけんかう せうしゃう天 諸 一らいかう 仏 よるくわ	南 むさうてん 無 むざいかき こくくわう天 諸 きゃうくわん 仏 けきゅう	分 かるら 身 けんたつは むりやう天 諸 きんなら 仏 まごら	南 しゅかう 無 くわうくわ天 せうくハう天 分 むしやうしょ 身 大ほんてん	分 むけん 身 やうちん 大ぽんてん 諸 めうかく 仏 とくかく
諸 よるくわ よるかう 仏 三ぢ	諸 一らいかう よるくわ 仏 しょち	諸 一らいくわ 一らいかう 仏 五ぢ	諸 ふけんかう 一らいくわ 仏 五ぢ	諸 ふけんくわ ふけんかう 仏 五ぢ	諸 らかんかう ふけんくわ 仏 六ぢ	諸 らかんくわ らかんかう 仏 十ぢ	諸 七ぢ らかんくわ 仏 十ぢ	諸 三けん ちっしん 仏 らやんくわ	諸 しょぢ 三けん 仏 二ぢ
分 ほとけ 身 ふうでん ほんふ天 諸 てうるい 仏 なんしう	南 むさう天 東 らかんかう ほんしゅ天 分 まごら 身 りうわう	分 むうん天 身 せんにん たけじざい 諸 四ぢ 仏 しゅかう	分 としん 身 八ち らくへんげ 諸 四ぢ 仏 しゅかう	南 うぶしょ ないほん 無 さぶしょ	諸 大ほん天 とそつ天 仏 ないほん	分 しきむへん 身 六ぢ やまてん 諸 えんま 仏 とうかく	南 とうしう 無 せいしう 分 なんしう たうりてん 身 北しう 諸 むけん 仏 やうちん	諸 くうむへん 四わうてん 仏 大きゃうくわん	南 一らいくわ 無 ふけんくわ 分 四わうてん せんにん 身 たうりてん 諸 ひひさう 仏 とそつてん
南 十ち 無 とうくわつ 諸 えんま 風てん 仏 左ふしょ	分 りうわう 身 むざいかき ぎょるい 諸 うぶしょ 仏 しゅかう	南 ほとけ てうるい 無 めうかく 分 むけん 身 やうちん	南 うかんくわ 無 ふけんくわ しゅたう 諸 よるくわ 仏 八ぢ	分 一らいくわ 身 大けんくわん げきやう 諸 よるかう 仏 しょぢ	分 三けん 身 しゅたう しりゃう 諸 けきゃう 仏 らいしん	分 よるかう 身 よるくハ 諸 けきゃう けんたう 仏 しゅたう	南 むけん 無 とうかく 分 うさいかき 虫るい 身 きょるい 諸 ちくしゃう 仏 てうるい	南 たけしさい 無 せんにん 分 らいしん かるら 身 せうくわう 諸 たうり天 仏 なんしう	分 けんたう 身 しゅたう らいしん 諸 なんしう 仏 しりゃう
分 しわう天 身 とうりてん まごら 諸 ふうてん 仏 らいしん	分 せんにん 身 さんしん 諸 かるら きんなら 仏 むさいかき	南 けんたつは 無 せうねつ 北しう 分 けうくわん 身 しゅたう	分 たうりてん 身 せうねつ さいしう 諸 ちうう 仏 えんま	新板浄土双六 南 とうくわつ 無 うざいがき ふん ちくしゃう 身 しゅら 諸 せんにん 仏 とそつてん		南 せんにん 無 ほくしう 分 めうかく とうしう 身 むけん 諸 さいしう 仏 たけりくわん	南 四わう天 無 たうり天 ちうう 諸 けうくわん 仏 けんたつは	南 せんせん天 無 せんけん天 やしゃ 諸 しゅら 仏 とうしう	南 けんたう 無 しゅたう 諸 なんしう けんたつは 仏 しりやう
分 とうくわつ 身 さんしん 諸 しゅかう としん 仏 ちくしゃう	分 としん 身 りうわう さいしん 諸 さいしう 仏 とそつてん	南 ちうう 無 なんしう 分 まこら 身 むけん りう王 諸 十ぢ 仏 ないほん	南 こくせう 無 しょぢ すいしん 諸 むさうてん 仏 大けうくわん			南 せうねつ 無 りうわう しゅら 分 さいしう 身 ちくしゃう	分 とうしう 身 うざいかき ちくしゃう 諸 しゅら 仏 さいしう	分 とうしう 身 さんしん 諸 ちくしゃう むさいかき 仏 ほくしう	分 さいしう 身 けうくわん うざいがき 諸 むざいがき 仏 なんしう
分 ふけんかう 身 しきむへん えんま 諸 ひひさう 仏 なんしう	諸 とうくわつ しゅかう 仏 えんま	分 けうくわん 身 十ぢ 諸 とうかく こくせう 仏 ないほん	南 ほとけ 無 十ぢ 分 五ぢ とうくわつ 身 とうかく 諸 めうかく 仏 大せうねつ	やうちん	諸 やうちん むけん 仏 大せうねつ	諸 せうねつ 大せうねつ 仏 大けうくわん	諸 けうくわん せうねつ 仏 大けうくわん	諸 むけん 大けうくわん 仏 しゅかう	南 とうしう 無 えんま 諸 こくせう けうくわん 仏 とうくわつ

いたという事例以外知ることができないが、万治・寛文年間以降の文献史料から、少なくともこの時期には庶民を遊び手として日待・月待行事の際などに遊ばれていたことは確認できた。これらの事実に推察を加えると、浄土双六は日本において庶民層に普及した文献上確認できる最初の絵双六であったと言うことができるだろう。

ではこのように文献上に現れた浄土双六の形態は、具体的にはどのようなものであったのか、実際に現存するいくつかの浄土双六によって検討を加えてみよう。

二、浄土双六の内容

(1) 現存する浄土双六

現存する絵双六のなかで、文献上に登場してくる浄土双六にあたるものとして、確認されたものは実はない。先行研究において浄土双六の名で紹介されている絵双六はいくつかあるが、そうした絵双六の中で、本来の名称が浄土双六であると確認されているものはなく、各研究者によって、「浄土双六」の名が与えられているにすぎない。しかも、そうした絵双六を「浄土双六」と名付ける際に、それらが実際に万治・寛文年間から元禄期にかけて流行した、文献上に見える浄土双六と同一のものであるとの考証は、なされていないのが現状である。筆者は現在までに、文献上に登場する浄土双六に相当するものと考えられる三種の絵双六を確認している。本節ではこれらの史料を使い、浄土双六の内容構成を具体的に説明するが、その前提として、まずこれらの絵双六が文献に現れた浄土双六と同一のものであるのか、再確認を行う必要があろう。

まず最初に挙げるのは、東京国立博物館所蔵の「双六類聚」[26]に所収されている物である〔図版No.1〕。この絵双六には表題は付されていないので、便宜上東博本としておく。東博本は、七十種の絵双六が貼り込まれている「双六類聚」の筆頭に収められているもので、紙本著色、一部金泥を使用した極彩色の美しい肉筆の絵双六である。たて122・4㎝、よこ82・6㎝とかなり大きい。作者や制作年代を知るための手掛かりとなりうるような情報は特になく、どのような人の手を経てここに収められたのか、明確なことは何もわからない。ただ、金やその他多くの顔料を豊富に使用していることから考え、後世の木版刷の物のような、一般庶民を対象として制作されたものではないと推察される。

次に、大東急記念文庫所蔵の「十界雙六」を挙げる〔図版No.2〕。この双六は、木版墨刷に筆彩が施されており、いわゆる丹緑本と呼ばれる技法を用いている。仏の光背など部分的には金も使用されている。全面に裏打ちがされ、折帖の状態になっている。表紙には題箋が貼られており、そこには「十界雙六」の名が記されている。題箋には象をかたどった蔵書印があり、石塚豊芥子[27]の旧蔵であったことを物語っている。「十界雙六」の名称も、制作当時のものではなく、石塚によって付された可能性がある。大きさは、たて117・0㎝、よこ65・3㎝と、これも東博本同様かなり大判である。

ところで、前章で触れたように、柳亭種彦は『還魂紙料』の中で

いくつかの浄土双六を部分的な模写によって紹介しているが、そのひとつ、「又一種　ここに模しいだせるハふるく上木せし物也　全図竪四尺横二尺七寸余丹緑青の類にて……」[28]として紹介している浄土双六がある。模写されている部分は「南瞻浮州」（南贍浮洲）とその周囲のみであるが、この絵柄が「十界雙六」に酷似している。彩色には、丹・緑・青が中心に使われており、このことも種彦の説明と合致する。この「十界雙六」は種彦の紹介している浄土双六と同じ版のものであると考えて、ほぼ間違いないであろう。

最後に挙げるのは、東博本同様「双六類聚」に貼り込まれた「新板浄土双六」である〔図版No.3〕。筆者が知る限り、「浄土双六」と明確に名が付された唯一のものである。「本町九丁目　ひしや久兵衛」と、版元名も確認できるが、制作年代については確定できない。たて41・2㎝、よこ55・6㎝の木版墨刷の絵双六であり、前者二点に対して小判で彩色もなく、粗末な印象のものである。

これら三種の絵双六は、形態の相違から、制作者や制作年代、受容層などが異なるものと推察できるが、内容構成に目を転じてみると、ほとんど差異はない。

いずれも全体の画面構成は、仏教でいう十界を基本としている。仏教においては、世界は下から地獄界、餓鬼界、畜生界、阿修羅界、人間界、天上界、声聞界、縁覚界、菩薩界、仏界の十の世界で構成される、と考えられている。地獄界から天上界までの六つの世界は凡夫の迷いの世界であり、六道と呼ばれ輪廻が永久に繰り返される（六道輪廻）。声聞界より上の四つの世界は、その輪廻から解放された悟りの世界で、仏道の修行者及び修行の結果悟りを得た仏の世界である。これら三種の絵双六の構成は、この仏教的宇宙観・世界観に従っている。最下段には叫喚、大叫喚などの八熱地獄と、永沈、閻魔が配置され、地獄界を構成している。二段目から五段目には、餓鬼界、畜生界、阿修羅界、人間界と天上界の一部が配されおり、二・三段目にまたがった中央部には南贍浮洲、すなわち我々が生活している地上があり、ここが振り出しにあたる。四向四果、三賢、十信といった修行の階位を示す言葉が並ぶ六段目は、仏道の修行段階にある僧の世界を示しており、声聞界、縁覚界にあたる部分である。これらは、本来は天上界の上段に位置するべきであるが、この双六では天上界が五段目から八段目までにまたがって配置されているので、修行の階梯を表すマスは天上界の中に置かれている。七・八段目は、天上界の中でも上層にあたる色界十八天と無色界天が置かれている。九段目には初地から十地までの菩薩の修行の段階を示すマスが配され、菩薩界が構成されている。最上段十段目は、菩薩の最高位である補処と妙覚、等覚があり、中央に仏の姿が描かれ上がりとなっている。これらの絵双六の構成においては――その詳細については後に述べるが――、例えば、声聞界・縁覚界が天上界の中間に位置する点など厳密に言うと必ずしも仏教でいう十界と順序的に符合しない部分も存在する。だが、それでも人間の住む南贍浮洲を振り出しに下方に地獄、上方に行くにつれ天上界、菩薩界を経て仏に到るという構成は、大略において仏教の宇宙観をベースにしているのであり、各マスの配置はやはり仏教宇宙との対応によって

検討されるべきものなのである。

以上のような構成のこれら絵双六は、文献上に登場する「浄土双六」に比定できるのであろうか。先に述べたように、大東急記念文庫の「十界雙六」は、『還魂紙料』の中で種彦が「浄土双六」として紹介している一点と同版のものと考えられる。しかし『還魂紙料』自体、文政年間に著された考証文学であり、実際に浄土双六が流行していた万治・寛文から元禄年間の実録にはあたらない。従って浄土双六の流行時の姿を知るためには、当然万治・寛文期の記録にあたる必要が出てくるのだが、当時の状況を伝える史料は、先述したように限られており、しかも浄土双六の形態に記述が及んでいるものは、非常に少ない。そのためここで浄土双六の全容を解明することは不可能であるが、以下に紹介する史料により、その断片をうかがい知ることに努めよう。

まず、前節の最後に掲げた『異説まちまち』には、著者の幼少の頃の思い出として、浄土双六に関する次のような記述がある。前節において略した部分も含めて次に引用する。

予幼少の時、父の許へ高野より来れる浄土双六有。上りを仏になし、左ぶしよ、右ぶしよ、等覚妙覚と云(ママ)を上りを列し、其下地と云より十地迄有。其下二三段は悲相天、悲悲相天をはじめ三十三天のうちの名有。夫より下は仙人天人の類、竜王の類、段々下は中有、六道ありて、第下(ママ)段は叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱、無間、永沈、等活、春粍(ママ)、黒縄、閻魔なり。紅蓮、大紅蓮はなかりしなり。不レ残楷書に書て、賽は黒檀にて、南無分身諸仏と、漆を以て大師流の真にて書たるなりし。一間四方程もありしなり。[29]

著者の幼少の頃は大体享保年間にあたると考えられるが、その頃に存在した浄土双六の内容を説明しているこの文章と、これら三種の絵双六を比較してみると、その類似性が良く判る。地獄の名が一部違うなど細かな点で相違は見られるが、全体的には合致していると考えてよい。また、やはり前節で掲げた「百味の夜食浄土双六」に「やうちんへおつるも有り、餓鬼道へゆくも有、一人は佛になりたる[30]」とあることから、元禄期に遊ばれていた浄土双六の内容もほぼ同様の物であったと予想される。このように考えると、種々の文献に「浄土双六」の名で登場する双六は、これら三種の絵双六とほぼ構成内容を等しくするものであったと判断しても、さほどの飛躍ではあるまい。こうした判断に立つことで漸く、本節の主題である浄土双六の内容の検討へと進むことが可能となるのである。

ところで、浄土双六は、どのような遊び方をする遊戯なのだろうか。種彦は『還魂紙料』で、浄土双六の遊び方を次のように紹介している。

さて此双六は南無分身諸仏の六字を、四角あるひは六角の木に書て目安とし、南閻浮州よりふり出し、あしき目をふれば地獄へ堕、よき目をふれば、天上に登り、初地より十地等覚妙覚等を経て、仏に止るを上りとするの遊戯なり。[31]

つまり、現在のような一から六までの数字を目とする賽ではなく、南・無・分・身・諸・仏の六文字を目とする賽を使って遊んだ、と

いうことである。この賽に関しては、先にあげた『異説まちまち』の中にも、同様の説明が見られる。浄土双六では、最上段の上がりにあたる〈仏〉と最下段の〈永沈〉の二つのマス以外、すべてのマスに「南　とうくわつ」「無　うさいかき」といったような詞書きが記されている。例えば振り出しの〈南瀾浮州〉には、「南　とうくわつ」「無　うさいかき」「分　ちくしやう」「身　しゆら」「諸　せんにん」「佛　とそつてん」という六つの詞書きがある。これは、ここで賽を振った時に出た目が南であったら〈とうくわつ〉のマスに移動し、無であったら〈うさいかき〉のマスに行くように、と賽の目に対する行き先を指定したものである。遊戯者は、この指示にしたがってコマを進めて行き、より早く上がりである〈仏〉に到達することを目指すのである。このように、各マスに記されている指示にしたがってコマを進めていく絵双六は、〝飛び双六〟形式のものと呼ばれている。最上段の〈仏〉は上がりであるので当然行き先の指定はない。最下段の〈永沈〉にも行き先の指示がなく、ここに入った者は遊戯から除外されることになる。

以上のように、「浄土双六」は仏教の宇宙観に基づいて構成された画面上を、人間界を振り出しに、南無分身諸仏の賽の目によって仏界から地獄界の間をコマが移動し、上がりの仏を目指す遊戯であるということになるだろう。従ってこの遊戯の持つ特性を正確に把握するためには、単に画面上の構成を見ただけでは不十分である。仏教の宇宙観に基づいて構成された画面を、コマがどのように移動していくのか、その移動形態の分析を合わせて行う必要があるのである。

(2) 浄土双六の構成と特徴

本節では、まず全体の画面構成、つまりマスの配置がどのように成されているのかを検討し、その後コマの移動形態に話を進めたいと思う。前節で紹介したように、三種の浄土双六はその構成内容をほぼ等しくしているが、相互に若干の相違点が見られ、こうした点を比較分析することで、三種の浄土双六の成立経緯を推定することも可能であるとも考えられる。だが、ここでは浄土双六の内容構成上の特徴をあきらかにすることが主な目的であるので、分析の対象としては、三種の中でも種彦によってすでに文政年間に古板として存在を確認されていたという点で、最も来歴のはっきりしている浄土双六と考えられる大東急記念文庫の「十界雙六」を用いることとする。ここでは説明の便をはかるため、各段に上から順番にAからJのアルファベット記号を付し、更に各段のマスに右から順に①から⑩の番号を付けることにする。このアルファベットと数字の組み合わせによって、例えば最下段のJ段の右端のマスはJ—①、右から二番目のマスはJ—②というようにマスの位置を示すこととする〔図1参照〕。

H・I段の二段にまたがった中央部に、〈南瀾浮州〉とかかれたひときわ大きいマスがある。このマスが浄土双六の振り出しにあたる。〈南瀾浮州〉＝南贍部洲は仏教に説かれるところの「我々が住むところ」であり、現世を意味する。つまり、遊戯者は、今現在自分が

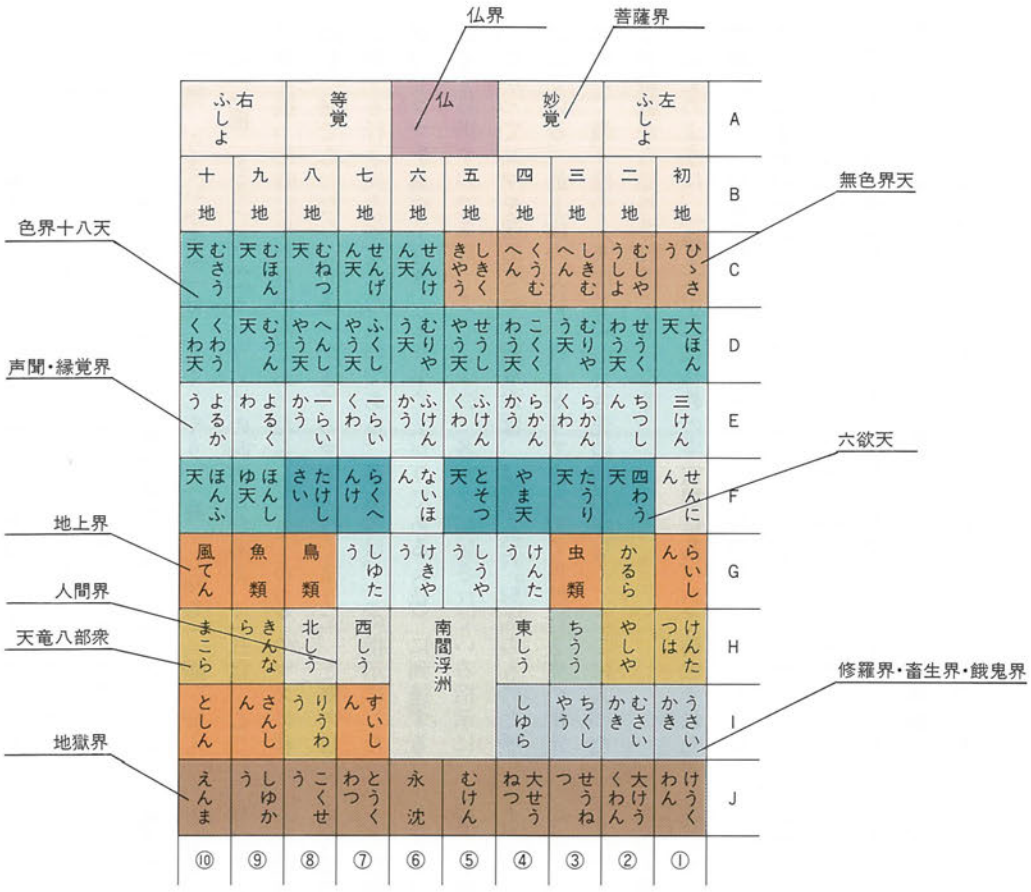


図　1

生活している世界を出発点として、この双六に描かれている世界を移動していくことになるのである。ここで簡単に仏教において考えられている宇宙の姿について説明をしておこう。仏教で説かれている宇宙の姿は通常「須弥山世界」と呼ばれており、その概要は次のようなものである〔図2参照〕。

虚空の中に風輪という円盤状のものが浮かんでいる。その風輪の上に水輪があり、さらにその上に金輪がある。この水輪と金輪の境界が「金輪際」で世界の底にあたる。金輪の表面は海となっており、その中央にそびえたつのが須弥山である。須弥山の周囲の海上には大陸が四つあり、これを四州と呼ぶ。振り出しの〈南瞻浮州〉はこの四州の一つ、須弥山の南方にある贍部洲という名の大陸の別称であり、閻浮提とも呼ばれる。他の三州はそれぞれ西方にあるのが牛貨州、北方にあるのが倶盧州、東方にあるのが勝身州と名付けられている。南贍部洲の地下には、地獄が層をなして存在しており、逆に上空には天神の住む天上界が浮かんでいる。(32)

仏教の宇宙観では、地獄界・天上界の位置は南贍部洲＝我々の住むところを基準地として説明されるのだが、浄土双六でも同様に南贍部洲＝現世、これは十界でいう人間界にあたるのだが、ここを基点に

上下にある他の九世界が構成されている。

八熱地獄は南贍部洲の地表に近い方から順に(1)等活(2)黒縄(3)衆合(4)叫喚(5)大叫喚(6)焦熱(7)大焦熱(8)無間と重なっている。[33] J段の構成を、この仏教の宇宙観による地獄の構造に当てはめてみると次のようになる。

J—① 〈けうくわん〉＝(4)叫喚
J—② 〈大けうくわん〉＝(5)大叫喚
J—③ 〈せうねつ〉＝(6)焦熱
J—④ 〈大せうねつ〉＝(7)大焦熱
J—⑤ 〈むけん〉＝(8)無間
J—⑥ 〈永沈〉
J—⑦ 〈とうくわつ〉＝(1)等活
J—⑧ 〈こくせう〉＝(2)黒縄
J—⑨ 〈しゆかう〉＝(3)衆合
J—⑩ 〈えんま〉

図2　須弥山世界の俯瞰図

定方晟『須弥山と極楽・仏教の宇宙観』(1973年 講談社) 13頁より転載。

J—⑥〈永沈〉とJ—⑩〈えんま〉に対応するものは八熱地獄にはない。永沈（ようちん）は地獄の異称であるが、浄土双六から生まれた言葉との説がある。このマスには次に行くマスの指定がされておらず、一度ここに入ったら二度と出ることができない。八熱地獄の最下層にあるとされる無間地獄よりも更に下に位置する地獄として、この双六では扱われているといってよい。J—⑩〈えんま〉は、一般的に地獄の主であり死者の罪の審判者として知られている閻魔大王のことを意味している。〈えんま〉は地獄界の入口にあたるマスであると考えられるだろう。

このように考えると、このJ段の十のマスを、左右どちらからでもよいが、〈えんま〉を筆頭に〈とうくわつ〉から〈むけん〉までの八熱地獄、そして最後に〈永沈〉がくるという順に配列すれば、仏教の宇宙観に沿った地獄界が構成されることになる。しかし実際には先に示したようにJ段の構成はこのような形にはなっていない。なぜかはもちろん知る由もないが、〈永沈〉というゲームからの脱落を意味するマスを強調する目的で画面中央部に置き、そのために全

体の序列が狂ったという可能性はあり得るのではないだろうか。

次にG・H・Iの三段を見てみよう。ここには人間界である南贍部洲を中心に、その周囲の世界を示すマスが配置されている。

I—①〈うさいかき〉とI—②〈むさいかき〉は、それぞれ有財餓鬼・無財餓鬼のことであり、餓鬼界にあたる部分である。その左隣、I—③〈ちくしやう〉は畜生界、I—④〈しゆら〉は修羅界を意味する。地獄界・餓鬼界・畜生界の三つの世界は、三悪趣（三悪道）と普通呼ばれており、この三悪趣と修羅界の合わせて四世界は、生前の悪業の報いとして生まれ変わる世界とされている。餓鬼界・畜生界・修羅界は地上と地下のちょうど境界上に存在する世界であると考えられており、双六上で地獄界の上段・I段に、〈南瞻浮州〉と接触するように配置されているのもそうしたことを表現しているためであろう。

〈南瞻浮州〉とその両側に配置されているH—④〈東しう〉＝東勝身州、H—⑦〈西しう〉＝西牛貨州、H—⑧〈北しう〉＝北倶盧州の合わせて四マスで四州が形成されており、人間界となっている。この〈南瞻浮州〉を中心とした人間界の周囲には、天竜八部衆を描いたマスが配されている。天竜八部衆は、仏教を守護する神々であり、天・竜・夜叉・阿修羅・乾闥婆・迦楼羅・緊那羅・摩　羅伽の八神をいう。この八神のうち最初に挙げた「天」は天上界に属する様々な天＝神の総称であり、特定の天を指すものではない。天竜八部衆のうち、この双六で描かれているのは、H—①〈けんたつは〉＝乾闥婆・H—②〈やしや〉＝夜叉・G—②〈かるら〉＝迦楼羅・I—⑧〈りうわう〉＝竜王・H—⑨〈きんなら〉＝緊那羅・H—⑩〈まこら〉＝摩　羅伽の六天である。阿修羅は部派によって天の一つとして数えたり、三悪趣に続く修羅界として一つの世界を構成したりと、扱い方に相違があるのだが、浄土双六では先述したように餓鬼界・畜生界に続いて修羅界のマスが配置されているので、天竜八部衆のうちには構成上含まれていないと考えたい。これらの六天は、版面では〈南瞻浮州〉の右斜め上と左斜め上にそれぞれ三天づつにまとまって配置されており、人間界の周囲で仏教の守護にあたっている様子を示す構成となっている。

G・H・Iの三段には、これらの他に、人間世界以外の地上世界を表す物として、I—⑦〈すいしん〉＝水神・I—⑨〈さんしん〉＝山神・I—⑩〈とします〉＝土神・G—①〈らいしん〉＝雷神・G—⑩〈風てん〉＝風神といった神々を表すマスと、G—③〈虫類〉・G—⑧〈鳥類〉・G—⑨〈魚類〉の生物を描いたマスが配置されている。また、H—③の〈ちうう〉は中有（中陰）のことであり、生物が死んで次の世に生まれ変わるまでの中間の期間にあたるが、ここには三途の川にいるとされる奪衣婆の姿が描かれている。

C・D・Fの三段は天上界にあたる部分である。天上界は下から六欲天と色界天・無色界天の三層に分かれており、F段にはそのうち最下層の六欲天が配置されている。六欲天とは、四王天・三十三天（忉利天）・夜摩天・兜率天・化楽天（楽変化天）・他化自在天の六種の天神のことをいい、天神とはいえ未だに欲望に囚われた存在である。双六上では、F—②〈四わう天〉＝四王天・F—③〈たう

り天〉＝三十三天・F―④〈やま天〉＝夜摩天・F―⑤〈とそつ天〉＝兜率天・F―⑦〈らくへんけ〉＝化楽天・F―⑧〈たけしさい〉＝他化自在天と右から順にF段に配置されている。六欲天のうち四王天（持国天・増長天・広目天・多聞天）は須弥山の中腹に住み、三十三天は須弥山の頂上に住む。ゆえにこれらは地上に住む天＝地居天と呼ばれる。その他の四天は空中に住む空居天と呼ばれ、須弥山に近い夜摩天から兜率天、化楽天、他化自在天と順に宮殿は高くなってゆく。双六上のマスの配置もこの順序に従っているといってよい。

E段には四向四果、三賢、十信といった仏道の修行階位を示すマスが並び、声聞界・縁覚界を構成している。十界の本来の序列からいえば、声聞界・縁覚界の二つは天上界の上に位置する世界なので、「十界雙六」でも天上界の上段に配置されてしかるべきと思うのだが、実際には六欲天と色界天に挟まれるような形で構成されている。なぜこのような位置に配されているのか、理由は判然としない。

修行の階位を示すマスは、E段に限らずF・G段にも一部配置されている。その全てを挙げると次のようになる。

G―④〈けんたう〉＝見道
G―⑤〈しりやう〉＝資糧
G―⑥〈けきやう〉＝加行
G―⑦〈しゆたう〉＝修道
F―⑥〈ないほん〉＝内凡
E―①〈三けん〉＝三賢
E―②〈ちつしん〉＝十信
E―③〈らかんくわ〉＝羅漢果
E―④〈らかんかう〉＝羅漢向
E―⑤〈ふけんくわ〉＝不還果
E―⑥〈ふけんかう〉＝不還向
E―⑦〈一らいくわ〉＝一来果
E―⑧〈一らいかう〉＝一来向
E―⑨〈よるくわ〉＝預流果
E―⑩〈よるかう〉＝預流向

E―③〈らかんくわ〉からE―⑩〈よるかう〉までの八つのマスは、「四向四果」と呼ばれる修行の段階を指すものである。四向四果は預流向から始まり、預流果・一来向・一来果・不還向・不還果・羅漢向を経て、最後に羅漢果の段階に達し修行の完成とするものである。双六上でのマスの配置は、この段階に従って左から右へと順に行われている。

F・G段の修行階位を示すマスは、E段の下に配置されているからといって必ずしも四向四果・十信・三賢より前段階の修行階位であると言い切ることはできない。修行階位には種々の説があり、浄土双六がどの説に基づいてこれらのマスを配置したのかはっきりとは判らないからである。ただそれらが〈南瀾浮州〉と、四向四果の間をちょうどつなぐような形で配置されていることから、人間界から仏界へ向かう道すじを表そうとしたのではないかと考えられる。

D段以上は非常に秩序だった構成にその特徴がある。C・Dの二

段には、天界のうち上層の天にあたる色界十八天と無色界天を示すマスが配置されている。色界十八天は十八の天で成り立っている世界である。下から梵衆天・梵輔天・大梵天・少光天・無量光天・極光浄天・少浄天・無量浄天・遍浄天・無雲天・福生天・広果天・無想天・無煩天・無熱天・善現天・善見天・色究竟天の順に重なっているこれらの天は、双六上では次の様な順で配列されている。

F—⑨〈ほんしゆ天〉＝梵衆天
F—⑩〈ほんふ天〉＝梵輔天
D—①〈大ほん天〉＝大梵天
D—②〈せうくわう天〉＝少光天
D—③〈むりやう天〉＝無量光天
D—④〈こくくわう天〉＝極光浄天
D—⑤〈せうしやう天〉＝少浄天
D—⑥〈むりやう天〉＝無量浄天
D—⑦〈ふくしやう天〉＝福生天
D—⑧〈へんしやう天〉＝遍浄天
D—⑨〈むうん天〉＝無雲天
D—⑩〈くわうくわ天〉＝広果天
C—⑩〈むさう天〉＝無想天
C—⑨〈むほん天〉＝無煩天
C—⑧〈むねつ天〉＝無熱天
C—⑦〈せんげん天〉＝善現天
C—⑥〈せんけん天〉＝善見天
C—⑤〈しきくきやう天〉＝色究竟天

広果天の前にあるべき福生天が遍浄天の前にきているほかは、序列通り正確に配列されている。梵衆・梵輔の二天が離れてE段にあるが、そこから何らかの意味を汲み取ることはできない。マスの数が足りなくなったため天上界の下層である六欲天に続けて配置した、と考えるのが順当ではなかろうか。C段にはC—⑤〈しきくきやう天〉に続き、C—④〈くうむへん〉＝空無辺処天・C—③〈しきむへん〉＝識無辺処天・C—②〈むしやうしよ〉＝無所有処天・C—①〈ひゝさう〉＝悲想悲々想処天という、無色界天の四つの天を表すマスが配置され、これで天上界がすべて構成されたことになる。

今まで説明してきたC段からJ段のうち、F段を中心に修行階位を示すマスで構成された声聞界・縁覚界を除く他の六つの世界、地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界・人間界・天上界は、〝六道〟と呼ばれ、輪廻の繰り返される世界とされている。そうした輪廻から解放されたのが、声聞界・縁覚界・菩薩界・仏界の四つの世界である。

「十界雙六」では、C段の非想非々想処天を頂点に六道の世界は完結し、B段以上は菩薩と仏の世界に入る。B段は右から左方向に〈初地〉から〈十地〉まで、菩薩の修行の段階を表すマスが順番どおりに置かれている。最上段A段には、中央の〈仏〉を中心に左右に〈等覚〉・〈妙覚〉と菩薩の最高位が置かれ、さらにその両脇に〈左ふしよ〉・〈右ふしよ〉がある。妙覚は菩薩の修行の最後の位にあたり、等覚は仏の悟りに等しいという意味で菩薩の最高位にあたる。補処は一生補処を略したものであり、一生が過ぎれば仏になれると

いう、これも菩薩の最高位である。[34] 上がりである仏については、ここでの説明は要しないであろう。

以上、浄土双六の全体の画面構成をかなり詳細に説明してきた。この双六が仏教の宇宙観をかなり忠実に再現していることがよくわかると思う。その構成上の特徴としては、各段の境界がそれぞれの世界のほぼ境界線に対応するという階層的な構造をなしており、更に各段のなかで序列に従ったマスの配列がなされているということを指摘できるだろう。

左ふしよ		妙覚		仏		等覚		右ふしよ	
初地	二地	三地	四地	五地	六地	七地	八地	九地	十地
ひゃさう	むしやうしよ	しきむへん	くうむへん	しきくきやう	せんけん天	せんげん天	むねつ天	むほん天	むさう天
大ほん天	せうくわう天	むりやう天	こくくわう天	せうしやう天	むりやう天	ふくしやう天	へんしやう天	むうん天	くわうくわ天
三けん	ちつしん	らかんくわ	らかんかう	ふけんくわ	ふけんかう	いらいくわ	いらいかう	よるくわ	よるかう
せんにん	四わう天	たうり天	やま天	とそつ天	ないほん	らくへんけ	たけしさい	ほんしゆ天	ほんふ天
らいしん	かるら	虫類	けんたう	しやうう	けきやう	しゆたう	鳥類	魚類	風てん
けんたつは	やしや	ちうう	東しう	南閻浮洲		西しう	北しう	きんなら	まこら
うさいかき	むさいかき	ちくしやう	しゆら			すいしん	りうわう	さんしん	としん
けうくわん	大けうくわん	せうねつ	大せうねつ	むけん	永沈	とうくわつ	こくせう	しゆかう	えんま

図 3

さて、こうした画面構成上の特徴を持つ浄土双六であるが、この遊戯の持つ特徴は、単に画面構成を見ただけでは明らかになったとは言えない。前述したように浄土双六は各マスに賽の目に応じた行き先が指定されており、それに従ってコマを進めていく遊戯であるから、階層的な画面構成と序列に従ったマスの配置が実際にどのように活用されるのかということは、遊戯者がこうした画面の上でどのようにコマを動かしていくのかという点、つまり行き先の指定を分析しないことには判らないからである。このコマの動き方を検討することによって、はじめて浄土双六の特質が明らかにされるのである。

なお、ここでは、画面構成について説明を行った方法とは反対に、上がりを基点として説明を加えていくこととする。

まず、上がりである〈仏〉に直接つながるマスを捜してみる。次の行き先として〈仏〉を指定しているマスは全部でA—③④〈妙覚〉・A—⑦⑧〈等覚〉・D—⑩〈くわうくわ天〉・F—⑩〈ほんふ天〉・G—⑧〈鳥類〉・J—⑦〈とうくわつ〉・J—⑨〈しゆかう〉の七つである。なかでも〈妙覚〉・〈等覚〉の二つは上がりに到達する確率が他のマスに較べて高い。〈妙覚〉では諸・仏の賽の目を振った場合、いずれも〈仏〉の上がりに行くことができる。その他の目に関しては指定が無いため、諸・仏の目が出るまでここで待機することになる。つまり上がりに

到ることが完全に約束されているマスである。〈等覚〉に関してもほぼ同様のことが言え、仏の目を出した場合には直ぐに上がりへと到り、諸の目の時は〈妙覚〉に移動することになっているので、この段階で既に上がることが確約されている。この二マスは、A段以下の段にあるマスに移動する可能性が全くなく、〈仏〉となることが保証されている、そういった場所である。〈くわうくわ天〉以下の他のマスには下段に転落していく可能性が残されており、必ずしも安全な位置ではない。むしろ上がりに到ることが幸運だと考えた方が適切であるだろう。例えば〈鳥類〉の場合、南・無を出せば〈仏〉・〈妙覚〉と一気に上昇するのだが、分・身の目を出してしまった時には、〈むけん〉・〈永沈〉へと転落してしまう。安直な表現をすれば、まさに極楽と地獄、運命の分かれ目といった指定がなされている。従って確実、安全に上がりに到るには、なにより〈等覚〉・〈妙覚〉にコマを進めることを目指すのが順当なやり方である。そこで次にこの〈等覚〉・〈妙覚〉を行き先として指定してあるマスを拾い出してみる。次の行き先としてこの二マスが指定されているものには、A—①②〈左ふしよ〉・A—⑦⑧〈等覚〉・A—⑨⑩〈右ふしよ〉・D—①〈大ほん天〉・F—④〈やま天〉・G—③〈虫類〉・G—⑧〈鳥類〉・H—④〈東しう〉・J—⑦〈とうくわつ〉・J—⑧〈こくせう〉の十ヶ所がある。ここでとりあえず、先程〈等覚〉・〈妙覚〉で指摘した特徴と同様のことが、〈左ふしよ〉・〈右ふしよ〉の二マスに関して確認できる。〈左ふしよ〉・〈右ふしよ〉の両マスは、〈等覚〉・〈妙覚〉に到ることが約束された場所であり、そこから転落する心配が全く無い位置なのである。つまりこの二マスに入れば〈等覚〉・〈妙覚〉に確実に進め、それはすなわち〈仏〉にも確実に上がることができる、ということを意味している。

こうした作業を繰り返して各マスに敷衍していくと、行き先の指定に、ある法則性を持つエリアが浮かび上がってくる。これを図にして示すと□の部分のようになる〔図3参照〕。

B段の〈初地〉より〈十地〉までの十マスでは、コマは非常に規則正しく移動していくように設定されている。例えば〈初地〉のマスでは、諸の目を出すと隣の〈二地〉に行き、仏を出すと一つ置いた〈三地〉に移動する。〈二地〉でも同様で、諸を出すと〈三地〉、仏を出すと〈四地〉に行く。このように段階を追って移動し、〈九地〉〈十地〉から〈右ふしよ〉〈左ふしよ〉に到り、〈等覚〉〈妙覚〉を経て上がりへと到達できるようになっており、やはりこの段以下へ下降移動していく可能性は全くない。

これと同様のことは、E段の〈よるかう〉から〈三けん〉までのマスにも当てはまる。〈よるかう〉——〈らかんくわ〉の間は、四向四果の順序に従って一つづつあがって行くか、もしくは〈初地〉から〈十地〉までのいずれかのマスへと飛ぶようにコマの移動が設定されている。〈ちつしん〉では〈三けん〉〈らかんくわ〉が次の行き先となっており、〈三けん〉からは〈初地〉〈二地〉への移動が指示されているので、これも同じように考えることができるだろう。このE段にあるマスもA・B段と同様、下降移動が設定されていない部分である。F—⑥〈ないほん〉・G—④〈けんたう〉・G—⑤〈し

りやう〉・G―⑥〈けきやう〉・G―⑦〈しゆたう〉の仏道の修行階位を表す言葉が書かれたマスに関してもほぼ同じことが言える。これらの五マスでは、ここまで説明してきたA・B・Eの三段にあるマスが移動先として指定されており――依然転落の可能性が残されているマスもあるが――着実に上昇していくことになる。つまりA・B・E段のマスと〈ないほん〉以下の五つのマスにひとたび入ると、あとは一歩一歩着実に上がりに向かってコマを進めていくことになる。それらは前進あるのみ、後退の可能性の全く無いマスとして設定されているのである。画面構成上は、〈初地〉から〈十地〉までの菩薩界を表すB段と四向四果等修行階位を示すマスが並ぶE段は離れているのだが、コマの移動から見るとこの二段は実は直結しているのである。実質的にE段はB段のすぐ下、すなわち天上界の最上層にあたるH段の上に配される性格のものである。こう考えると、画面構成上、天上界の中間に置かれていた声聞界・縁覚界が、コマの移動から見た場合、十界の序列通り天上界の上に位置するものとして扱われているということができるであろう。

以上の部分で画面構成上階層的な構造をなす浄土双六に、修行の過程を経て菩薩となり、着実・確実に上がりである〈仏〉に到る一本の〝道〟が内包されていることが明らかになったと思う。この〝道〟は決して現在自分のコマがある位置から後退することのない、前進のみ保証されている場所であるため、なるほど上がりを目指すには確実な〝道〟であろう。しかし、前進のみが保証されているということは、一度その〝道〟に入ってしまうと二度とそこから外れることができない、ということでもあるから、遊戯者は、この〝道〟にコマが入ってしまった場合、前に進むことのできる目をだすためにひたすら賽を振り続けなければならなくなる。前進できる目は各マスとも諸・仏の二つである場合が多い。確率でいえば三回に一回。〈仏〉になるにはかなり時間がかかるに違いない。そしてその間に他のマスから一気に上がりに到る者も出てくる。このように考えると、この道を形成している修行階位を示すマス以外から、直接〈仏〉に行けるマス、および極めて上がりに近い位置にある〈等覚〉・〈妙覚〉・〈左ふしよ〉・〈右ふしよ〉に行くことのできるマスを挙げてみる必要がでてくる。

それを示すと以下のようになる。

〈仏〉――――――〈くわうくわ天〉〈ほんふ天〉〈鳥類〉〈とうくわつ〉〈しゆかう〉

〈妙覚〉〈等覚〉――〈大ほん天〉〈やま天〉〈虫類〉〈東しう〉〈とうくわつ〉〈こくせう〉

〈左ふしよ〉〈右ふしよ〉――〈くわうくわ天〉〈風てん〉〈魚類〉

これら合計十二のマスが、〈仏〉に近い位置にあるものである。これらは地獄界から天上界までの各界に配されており、各界から一足飛びに上がりに到ることができるようになっている。この十二のマスへの移動形態には、修行階位を表したマスの場合のような法則性は無く、賽の目次第、つまり偶然という運に頼る以外に方法はない。しかしそれゆえに逆に運に恵まれれば簡単に上がることも可能なのである。例えば振り出しの〈南瀾浮州〉で南を振って〈とうくわつ〉

に進み、そこで再び南を振れば〈仏〉に飛んで、もう上がりとなる。遊戯者が上がりに到る時、地道に修行道を一歩一歩すすんで行くよりも、このように賽の目の偶然性で上がるパターンの方が多かったのではないだろうか。この点を画面構成と合わせて、押し並べて見た場合、浄土双六は段階を追って上がりに向かって進んでいく順路性をその特徴に持っているが、それ以上に賽の目の出方次第という偶然性が重要な要素となっている遊戯であるということができるだろう。

以上、浄土双六を画面構成の面からと、コマの移動形態の面からの二つの側面から分析してみた。それによって浄土双六の特質として次の二点を指摘することができるだろう。

まず第一点として、階層的な構造を持っていることが挙げられる。この点は、画面構成を検討した際に既に述べているので繰り返しになってしまうが、仏教の宇宙観である十界の境界線がほぼ双六の各段の境界線に対応しており、最下段の地獄界から最上段の仏界まで下から順に層を成して構成されている。振り出しにあたる〈南瞻浮州〉は、遊戯者が現在いる場所＝人間界であり、ここが基準地となる。遊戯者はこの基準地から自分の代理――あるいは分身といってもよい――であるコマを賽の目に従って移動させるわけだが、コマが基準地より上昇すればするほど、この双六で最上位の場所となっている〈仏〉に近づくことを意味する。逆に基準地より下降することは、現在自分がいる場所よりも更に低い位の場所へ移動することになる。〈永沈〉のマスはその最下位の場所として位置づけられているのである。

第二点めには、最上位のマスである〈仏〉に到る過程となるコマの移動形態に、二つのパターンがあることを指摘できる。第一のパターンは、階層的な構造の中に内包されている〝道〟の構造をたどって上昇移動していくという、順路性の要素の強いパターンである。もう一方は、賽の目の出方次第で一気に上昇移動していく偶然性の要素の強いパターンである。この場合急速な上昇もあり得るが、その反対に下降移動する可能性も常に存在する。

コマの移動形態はこのような二つのパターンに分別できるが、どちらのパターンで移動していく場合でも、コマはただ物理的に移動していくのではない。あるマスから別のマスへコマが移動していくということには、双六の画面上には現れないが、意味があるのである。修行の過程を示す〝道〟をコマが移動していく場合、そのコマが上昇することはすなわち修行の完成度が増していくことを意味する。賽の目の偶然性によって移動する場合でも、コマは気まぐれに移動しているのではない。より上位のマスに上昇していく場合は善業の報いであり、逆に下位のマスに下降していくことは悪業の報いであることを意味する。コマの移動は、何らかの価値によって決定されているのである。これは双六の画面上には描かれていないことである。しかし階層的な構造をもつ画面上をコマが移動していく場合、そこには何らかの価値基準が当然存在するのである。

おわりに

浄土双六は、最初に述べたとおり日本において庶民に普及した最初の絵双六であり、これ以後多様化する絵双六の基本形としての役割を果たしたと考えられる。浄土双六そのものは、本論中で述べたとおり、ほぼ享保年間を境として衰微したようであるが、階層的な画面構成を持ち、なおかつその中を移動するコマのルートが順路性・偶然性の両面的な性格を有するという構成上・内容上の特質は、その後生まれた種々の絵双六に何らかの形で受け継がれていった。例えば、一見形態的にも主題的にも浄土双六とかけ離れているように見える道中双六においても、この特質は継承されている。コマは日本橋を出発し、東海道五十三次の宿場が道程どおりに配列されたマスを、賽の目の数だけ前進していく。この場合、コマの移動は順路性の要素の強いパターンによって差配されているが、止まったマスに書かれた「振り出しに戻る」「○○へ飛ぶ」といった指示によって順路から外れて移動する偶然性の要素の強いパターンも同時に持ち合わせている。つまり、浄土双六の持つ構成上・内容上の特質は、絵双六という遊戯そのものを性格づける基本的性質であるということができるであろう。特に、人間の身分・地位といった、人間に付随する価値をテーマとしている点で、浄土双六の系譜上に位置づけられる出世双六においては、この浄土双六の特質がより完全な形で受け継がれていったのである。

ところで、浄土双六の衰微以降、仏教教義を題材とした絵双六が完全に姿を消してしまったかと言えば、実はそうではない。特に寺院が多く、仏書の需要が高かった京都においては、書林・菊屋喜兵衛を中心に幕末に至るまで版行されつづけた。菊屋版として確認されているものに「弘化改正　仏法双六　仮名付　全」〔図版No.4〕と、十年後に増補再版された「善悪双六　極楽道中図絵」〔図版No.5〕の二点がある。内容的には浄土双六に見られた十界の宇宙観と輪廻の思想は見られず、現世での善行・悪行の報いとして極楽・地獄へ至るという、浄土思想の影響が強く現れており、浄土双六と比較して世俗化していると言ってよい。これらの双六では現世、すなわち人間界を中心に世界が構成されており、浄土双六に多く描かれていた天上界をはじめとする他の世界、つまり人間から見た場合の「異界」は排除された形になっている。

浄土双六に描かれていたこの「異界」の部分は、その後の絵双六に別の形で表出する。東京都立中央図書館東京誌料所蔵の「仏法双六」〔図版No.6〕は、その点を端的に示す好資料である。[35] 全体的な画面の構成は、浄土双六と同様の形式をとっており、最下段の地獄の部分から明らかに浄土双六の系譜上にあるものと判断できる。但し、各マスに描かれている内容を見ると、七福神などの民間信仰に基づくものが多く、仏教の世界観をほぼ忠実に再現した浄土双六から大きく変化している。特に注目すべきは、浄土双六において「異界」として描かれていた部分に、妖怪や化け物が登場していることである。絵双六の中には、妖怪・化け物尽くしで構成されたものが数多くあるが、これらは浄土双六に描かれた「異界」への興味が「異界」

〔図版　No.4〕

資 料 名：弘化改正（コウカカイセイ）　佛法雙六（ブッポウスゴロク）　假名附（カナツキ）　全（ゼン）
作 者 名：不　明
版 元 名：菊屋　喜兵衛／版（京都　寺町通仏光寺下ル）
　　無量菴／蔵梓
制作年代：1848年（弘化５）
技　　法：木版多色刷
法　　量：タテ；59.2cm　ヨコ；67.3cm
所　　蔵：東京都立中央図書館東京誌料

来迎	信□□ 懈慢	善□■ 疑城	疑城胎宮	信□□ 極楽	善□■ 懈慢	極楽世界	
邪定聚	疑□■ 改悔 親	悪■■ 南州	信□□ 疑城	善□□ 来迎	不定聚	信□□ 疑城	善□■ 懈慢
王法	疑□■ 不定	信□□ 諸仏	善□□ 仁ギ	改悔懺悔	信□□ 忠孝	善□□ 王法	
仁義	疑□■ 邪定	信□□ 報謝	善□□ 忠孝	宿善	疑□■ 南州	信□□ 仁義	善□□ 改悔
天道 五衰	信□□ 至道	善□□ 人道	疑□□ 三州	悪■■ 修羅	人道 四苦 生老	信□□ 浄土	善□□ 至道 病
貧欲	悪■■ 俞盗	信□□ 浄土	善□□ 飲酒	疑□■ 畜生	瞋意（しんい）	悪■■ 妄語	信□□ 浄土
法滅之時	信□□ 浄土	善□□ 天道	悪■■ 三州	疑□■ 修羅	三州	信□□ 南州	善□□ 法滅
摂取不捨	信□□ 極楽	善□□ 正定	賛嘆供養	信□□ 摂取	善□□ 正定	懈慢界	信□□ 極楽
報謝相続	信□□ 摂取	善□■ 賛嘆	精進	信□□ 禅定	善□□ 精進	疑□■ 瞋意	悪■■ 妄語
忍辱	信□□ 禅定	善□□ 精進	疑□■ 瞋意	悪■■ 妄語	持戒	信□□ 精進	善□□ 忍辱
布施	信□□ 忍辱	善□□ 持戒	疑□■ 俞盗	悪■■ 貧欲	殺生	信□□ 至道	善□□ 人道
俞盗	信□□ 至道	善□□ 人道	疑□■ 飲酒	悪■■ 愚チ	妄語	信□□ 至道	善□□ 天道
邪婬	信□□ 持戒	善□□ 天道	疑□■ 瞋意	悪■■ 愚チ	飲酒	信□□ 持戒	善□□ 至道
餓鬼	善□■ 畜生	悪■■ 地獄	疑□■ 地獄	地獄	畜生	善□■ 修ラ	悪■■ 地獄
正定聚	二河白道	信□□ 極楽	善□■ 摂取	諸仏護念	信□□ 正定	善□■ 報謝	禅定智恵
忠孝	信□□ 報謝	楠正成	善□□ 応念 正行	疑□■ 邪定	浄土門	信□□ 忠孝	善□□ 宿善
人道	信□□ 浄土門	疑□■ 愚痴	南胆	心	部州	善□□ 至道門	悪■■ 殺生
愚痴	悪■■ 貧欲	信□□ 浄土	善□□ 天道	疑□■ 法滅	飲酒	信□□ 持戒	善□□ 至道
修羅	信□□ 天道	善□□ 三州	悪■■ 地獄	疑□■ 畜生	畜生	善□□ 修ラ	悪■■ 地獄
疑城胎宮	善□■ 懈慢	信□□ 疑城	善□□ 来迎	邪定聚	疑□■ 改悔 親	悪■■ 南州	信□□ 疑城
不定聚	善□■ 懈慢	信□□ 疑城	善□□ 来迎	王法	疑□■ 不定	信□□ 諸仏	善□□ 仁ギ
仁義	疑□■ 邪定	信□□ 報謝	善□□ 忠孝	宿善	疑□■ 南州	信□□ 仁義	善□□ 改悔
人道	信□□ 浄土	善□□ 至道 病	疑□□ 愚チ	悪■■ 殺生	天道	信□□ 至道	善□□ 人道
瞋意	悪■■ 妄語	信□□ 浄土	善□□ 天童	疑□■ 修ラ	貧欲	悪■■ 俞盗	信□□ 浄土
三州	信□□ 南州	善□□ 法滅	悪■■ 修ラ	疑□■ 餓鬼	法滅之時	信□□ 浄土	善□□ 天道
懈慢界	信□□ 極楽	善□■ 賛嘆	報謝相続	信□□ 摂取	善□■ 賛嘆	精進	信□□ 禅定
忍辱	善□□ 精進	疑□■ 瞋意	悪■■ 妄語	持戒	信□□ 精進	善□□ 忍辱	疑□■ 愚チ
布施	信□□ 忍辱	善□□ 持戒	疑□■ 俞盗	悪■■ 貧欲	殺生	信□□ 至道	善□□ 人道
俞盗	信□□ 至道	善□□ 人道	疑□■ 飲酒	悪■■ 愚チ	妄語	信□□ 至道	善□□ 天道
邪婬	信□□ 持戒	善□□ 天道	疑□■ 瞋意	悪■■ 愚チ	飲酒	信□□ 持戒	善□□ 至道
餓鬼	善□■ 畜生	悪■■ 地獄	疑□■ 地獄	地獄	畜生	善□■ 修ラ	悪■■ 地獄
正定聚	二河白道	信□□ 極楽	善□■ 摂取	諸仏護念	信□□ 正定	善□■ 報謝	禅定智恵
忠孝	信□□ 報謝	楠正成	善□□ 応念 正行	疑□■ 邪定	浄土門	信□□ 忠孝	善□□ 宿善
人道	信□□ 浄土門	疑□■ 愚痴	南胆	心	部州	善□□ 至道門	悪■■ 殺生
愚痴	悪■■ 貧欲	信□□ 浄土	善□□ 天道	疑□■ 法滅	飲酒	信□□ 持戒	善□□ 至道
修羅	信□□ 天道	善□□ 三州	悪■■ 地獄	疑□■ 畜生	畜生	善□□ 修ラ	悪■■ 地獄
疑城胎宮	善□■ 懈慢	信□□ 疑城	善□□ 来迎	邪定聚	疑□■ 改悔 親	悪■■ 南州	信□□ 疑城
不定聚	善□■ 懈慢	信□□ 疑城	善□□ 来迎	王法	疑□■ 不定	信□□ 諸仏	善□□ 仁ギ
仁義	疑□■ 邪定	信□□ 報謝	善□□ 忠孝	宿善	疑□■ 南州	信□□ 仁義	善□□ 改悔
人道	信□□ 浄土	善□□ 至道 病	疑□□ 愚チ	悪■■ 殺生	天道	信□□ 至道	善□□ 人道
瞋意	悪■■ 妄語	信□□ 浄土	善□□ 天童	疑□■ 修ラ	貧欲	悪■■ 俞盗	信□□ 浄土
三州	信□□ 南州	善□□ 法滅	悪■■ 修ラ	疑□■ 餓鬼	法滅之時	信□□ 浄土	善□□ 天道
懈慢界	信□□ 極楽	善□■ 賛嘆	報謝相続	信□□ 摂取	善□■ 賛嘆	精進	信□□ 禅定
忍辱	善□□ 精進	疑□■ 瞋意	悪■■ 妄語	持戒	信□□ 精進	善□□ 忍辱	疑□■ 愚チ
布施	信□□ 忍辱	善□□ 持戒	疑□■ 俞盗	悪■■ 貧欲	殺生	信□□ 至道	善□□ 人道
俞盗	信□□ 至道	善□□ 人道	疑□■ 飲酒	悪■■ 愚チ	妄語	信□□ 至道	善□□ 天道
邪婬	信□□ 持戒	善□□ 天道	疑□■ 瞋意	悪■■ 愚チ	飲酒	信□□ 持戒	善□□ 至道
餓鬼	善□■ 畜生	悪■■ 地獄	疑□■ 地獄	地獄	畜生	善□■ 修ラ	悪■■ 地獄

〔図版　No.5〕

資 料 名：善悪雙六（ゼンアクスゴロク）　極楽道（ゴクラクドウ）中図絵（チュウズエ）
作 者 名：黒河　玉水／画
版 元 名：菊屋　喜兵衛／版（京都　寺町通四條下ル町）
　　めとぎや　宗八／版（京都　寺町通三條下ル町）
制作年代：1858年（安政５）増補再版
技　　法：木版多色刷
法　　量：タテ；58.4cm　ヨコ；67.1cm
所　　蔵：東京都立中央図書館東京誌料

諸仏護念　弥陀経
信□□　十八願
善□■　摂取

疑城胎宮　大経
此所五辺休　仏智ふしぎを　うたがう罪にて　五百歳中　花ひらけず
信□□　極楽

第二十果遂願　大経
信□□　疑城
疑■■　改侮
善□□　十九

第十九聖衆来迎願　大経
信□□　懈慢
疑■■　改侮
善□□　廿双

王法
信□□　忠孝
疑■■　十九双
善□□　仁義

仁義
信□□　常行
疑■■　廿願
善□□　忠孝

改侮懺侮
信□□　仁義
善□□　王法

五種正行
信□□　仁義
善□□　王法
悪□■　改侮

天道　五衰
善□■　南州
悪□■　邪婬
信□□　宿善
疑■■　妄語

宿善
信■■　浄土

愚痴
信□□　宿善
疑■■　殺生
善□□　聖道
悪□■　偸盗

瞋恚
信□□　宿善
疑■■　火難
善□□　忍辱
悪□■　修羅

剱難（けんなん）
信□□　宿善
疑■■　さい
善□□　天道
悪□■　修羅

雷難
信□□　宿善
疑■■　邪婬
善□□　天道
悪□■　火難

信両断
信□□　十八双
持悪成善　観経下々品
疑■■　地獄

さいの河原
疑■■　修羅
善□□　天道
悪□■　畜生

極楽

第十八念仏往生願　大経
二河白道
信□□　極楽

第卅五女人成仏願
中将姫
信□□　極楽
善□■　諸仏

禅定智恵
信□□　天道
疑■■　聖道
禅□□　南州

忠孝
信□□　知恩
疑■■　知恩

浄土門　易行道
信□□　王法
疑■■　風難
善□□　正行
悪□■　改侮　生死の海

聖道門　難行道
信□□　持戒
疑■■　愚ち
善□□　布施
悪□■　地しん

持国天　人寿五百歳　東弗婆提
信□□　浄土門
疑■■　愚痴
南部州　人寿百歳　北倶盧州　人寿千歳
善□□　聖道門
悪□■　飲酒
多聞天　人寿二百五十歳　西瞿耶尼
心
増長天　広目天

貪欲
信□□　宿善
疑■■　水難
善□□　布施
悪□■　両断

邪婬
信□□　宿善
疑■■　偸盗
善□□　南州
悪□■　剱難

風難
信□□　宿善
疑■■　水難
善□□　天道
悪□■　さい

火難
信□□　宿善
疑■■　風難
善□□　天道
悪□■　瞋恚

修羅道
疑■■　畜生
善□□　さい
悪□■　餓鬼

畜生道
善□■　修羅
悪□■　餓鬼

懈慢界　□胎経
此所へ来る人は　仏智のふしぎを　うたがふつみにて　五辺休むへし
信□□　極楽

摂取不捨　観経
信□□　十八双
善□□■　卅五双

智恩報徳
信□□　卅五
善□□　摂取

常行大悲　大悲経
自信教人信
信□□　諸仏
善□□■　知おん

精進
信□□　せん定
疑■■　聖道
善□□　禅定
悪□■　かみなりへ

忍辱
信□□　せん定
疑■■　瞋恚
善□□　精進
悪□■　火難

布施
信□□　忍にく
疑■■　妄語
善□□　持戒
悪□■　貪欲

持戒
信□□　精進
疑■■　飲酒
善□□　忍にく
悪□■　殺生

飲酒
信□□　宿善
疑□□　瞋恚
善□□　南州
悪□■　偸盗

妄語
信□□　宿善
疑■■　邪婬
善□□　南州
悪□■　地しん

偸盗
信□□　南州
疑■■　貪欲
善□□　天道
悪□■　雷難

殺生
信□□　宿善
疑■■　両断
善□□　南州
悪□■　剱難

水難
信□□　宿善
疑■■　かみなり
善□□　天道
悪□■　地しん

地震
信□□　宿善
疑■■　剱難
善□□　天道
悪□■　さい

餓鬼道
善□■　畜生
悪□■　地獄

地獄

岩城　紀子

〔図版　No.6〕

資 料 名：仏法雙六（ブッポウスゴロク）
作 者 名：不　明
版 元 名：不　明
制作年代：不　明
技　　法：木版墨刷
法　　量：タテ；73.6cm　ヨコ；53.3cm
所　　蔵：東京都立中央図書館東京誌料

弁財天
一　薬師
二　釈迦

善道大師
一　地蔵
三　薬師

寿老人　二　たるま
一　大黒
三　西王母
五　役行者

明恵上人　二　山姥
一　一幅上人
三　万歳　五　まこら

せうく
一　きんなら
三　ぬらりひょん
五　仙人　六　えんま

せうつばく
六　ねこまた
五　へびがみ
三　牛鬼
一　がき

ふらりひ
一　うふめ
三　きゃうくわんちこく
四　雪女
五　犬神

赤舌
一　がき
三　雪女
五　海ぼうず
六　せうきち

山わらう
一　赤した
二　てんぐ
三　うわん
四　びんぼう神

せうきら
一　山わらう　二　せきぞう
三　おとろし
五　酒天とうし
六　ぬらりひょん

きゃうくわんちこく
一　わらく
二　鈎の山
三　やしや
五　がき

地蔵
四　釈迦
五　薬師

円光大師
一　弁天
三　善道大師
四　釈迦

福禄寿　六　犬神
一　夷
三　東方朔
五　布袋

解脱上人　四　風神
一　達マ
二　文学上人
三　きんなら　五　仙人

大黒舞
一　まこら
二　酒天とうし
四　山びこ
五　ふらりひ

雷神
一　てん人
二　日蓮上人
六　仙人

赤舌
一　がき
三　雪女
五　海ぼうず
六　せうきち

やしや
一　せうねつちごく
三　てんぐ
五　ふらりひ
六　海ぼうず

せうきら
一　山わらう　二　せきぞう
三　おとろし
五　酒天とうし
六　ぬらりひょん

弘法大師
五　文学
一　薬師
三　地蔵　四　弁天

東方朔　四　古札納
一　文学上人
五　かりやうびん

空や上人
一　役行者
二　明恵上人
三　風神　五　文学上人

古札納　六　うわん
一　きんなら
三　山うは
四　風神
五　せうく　二　童子

せきそろ　六　おとろし
一　かっぱ
三　猩々
四　見こし入道
五　きんなら

えんま王　二　むけんちこく
一　だるま
三　ふうじん
五　犬かみ
四　大こく

うわん
一　山うは
二　ちくせう
五　山びこ
六　しゅら

みこし入道
一　わらく　六　天狗
二　山びこ
三　かみきり
五　ゆき女

目一ツ坊　二　がき
一　みこし入道
三　ぬらりひょん
四　わらく

ちくせう
一　赤した
二　目ひとつほう
四　がごう
五　ねこまた

極楽浄土
上り

元三大師
四　七夕
一　釈迦
三　地蔵

文珠菩薩
一　普賢
三　元三大師
五　善道大師

日蓮上人
一　善道大師
二　元三大師
三　弘法大師

西王母　一　一幅上人
四　犬神　三　天人
五　文学上人

達广
一　空や上人　四　犬神
二　文学上人　六　風神
五　一幅上人

維广
一　西王母
二　仙人
三　雷神　五　犬神

やくはらい　二　かっぱ
一　万歳
三　ぬっぺらぼう
五　やしゃ　六　えんま

酒天童子
一　山うは
三　えんま
四　しゃうく
五　かりゃうびん

ぬらりひょん
一　ふらりひ　三　山姥
三　うふめ
五　海坊主
六　うわん

ぬっぺらぼう
一　山びこ　三　犬神
二　雪女
五　みこし入道
六　目一ツ坊

かっぱ
一　山うば
三　しゅら
四　かごう
五　まこら

一　雷神
二　びんぼう神
三　うふめ
四　ぬれ女
五　万歳
六　風神

しゅら
一　せうつうばく
二　山びこ
三　うわん
五　山びこ
六　むけんちこく

むけんちこく
一　きゃうくわんちこく
二　こくせうちこく
三　しゅこうちこく
四　やうちん

薬師
一　上り
五　弁財天
六　地蔵

普賢菩薩
一　毘沙門　四　雷神
二　布袋　三　夷

毘沙門　四　雷神
一　普賢
二　布袋　三　夷

大黒
四　風神
一　文珠
二　弘法大師　三　西王母

文学上人
一　毘沙門
二　万歳
三　西王母
四　日蓮上人
五　伝教大師

一幅上人　六　天人
一　七夕
二　寿老人
五　伝教大師

かるら王　四　天狗
一　天人
二　げだつ上人
三　めう恵上人
五　かりやうひん

大せいくわんき天
一　風神　五　猩々
二　達广
三　大黒舞　四　山うは

かっぱ
一　きんなら
三　猩々
四　見こし入道
五　きんなら

ぬれ女　二　がき
一　がき　三　犬かみ
四　へびかみ
五　きんなら

おとろし
一　へびがみ
二　ぬらりひょん
三　せうつばく
六　えんま

かごう
一　塗仏　六　まこら
三　てんぐ
四　わらく
五　かみきり

鈎の山
一　やうちん
四　とうくわつちこく
五　犬かみ
六　赤舌

しゅこうちこく
一　うし鬼
四　こくせうちこく
五　かき
六　むけんちこく

布袋
三　天人
一　西王母
四　七夕
五　空や上人

夷
一　寿老人
三　文珠
四　東方朔

伝教大師
一　善道大師
二　弁天　五　薬師

役行者　四　きんなら
一　七夕
二　文珠
三　一幅上人　五　弘法大師

七夕
四　寿老人
五　伝教大師
六　福禄寿
一　万歳　一　雷神

万歳
三　七夕　一　大黒舞
四　大黒
五　寿老人

仙人
一　ゆいま　五　てん人
六　天狗

びんぼう神
一　大黒舞　五　やしゃ
二　やくびょうかみ
四　ちくせい
六　仙人

へび神　五　風神
一　せん人
二　大せいくわんき天
四　やくびょう神

犬神　五　やうちん
三　きんなら
四　やくびょう神
六　仙人

かりやうびん
一　天人　五　空や上人
二　達广
三　しゃうく

やくびょう神　四　がき
三　びんぼう神
一　せうく
二　てん人
五　風神　六　ようちん

きんなら　二　七夕
五　かがう
六　山びこ
四　犬神
三　天人　一　大せいくわんき天

まこら　四　山わらう
一　達ま
三　風神
五　へびがみ
六　山うば　二　たるま

風神　一　山わらう
三　えんま
四　やくはらい
五　しゃうく
六　がごう

山びこ　二　ねこまた
一　しゃうく
三　せきそろ
四　えんま
五　雷神

天狗
一　へびかみ
二　せうつうばく
三　古札納
五　かるら王

わらく
一　風神
二　かみきり
三　かっぱ
五　ぬれ女

海坊主
一　えんま
三　かっぱ
四　やしや
五　山わろう

かみきり
一　山びこ
二　うわん
三　ちくせう
五　がき

ぬりぼとけ
六　かみきり
一　うみぼうず
二　うふめ
五　ぬっぺらぼう

ひやうすべ
一　やしや　五　やうちん
三　ねこまた
四　わらく
六　かっぱ

ゆき女
一　ふらりひ
三　せうきら
六　ひやうすべ
五　まこら

ねこまた
一　鈎の山　六　海ぼうず
二　ちくせう
三　かき
五　やしゃ

牛鬼
一　雪女
三　むけんちこく
五　ちくせう

釈迦
四　上り
五　薬師
六　地蔵

布袋
三　天人
一　西王母
四　七夕
五　空や上人

夷
一　寿老人
三　文珠
四　東方朔

伝教大師
一　善道大師
二　弁天　五　薬師

役行者　四　きんなら
一　七夕
二　文珠
三　一幅上人　五　弘法大師

天人
一　役行者
二　げだつ上人
三　かろら王
四　がき

かりやうびん
一　天人　五　空や上人
二　達广
三　しゃうく

やくびょう神　四　がき
三　びんぼう神
一　せうく
二　てん人
五　風神　六　ようちん

まこら　四　山わらう
一　達ま
三　風神
五　へびがみ
六　山うば　二　たるま

風神　一　山わらう
三　えんま
四　やくはらい
五　しゃうく
六　がごう

山びこ　二　ねこまた
一　しゃうく
三　せきそろ
四　えんま
五　雷神

海坊主
一　えんま
三　かっぱ
四　やしや
五　山わろう

かみきり
一　山びこ
二　うわん
三　ちくせう
五　がき

ぬりぼとけ
六　かみきり
一　うみぼうず
二　うふめ
五　ぬっぺらぼう

ひやうすべ
一　やしや　五　やうちん
三　ねこまた
四　わらく
六　かっぱ

ゆき女
一　ふらりひ
三　せうきら
六　ひやうすべ
五　まこら

ねこまた
一　鈎の山　六　海ぼうず
二　ちくせう
三　かき
五　やしゃ

牛鬼
一　雪女
三　むけんちこく
五　ちくせう

に住む物である妖怪・化け物に仮託した形で現れたものであろう。幕末期にかけて落語や芝居を中心に怪奇趣味的なものが流行するが、こうした現象と合わせて検討する必要があろう。

また、浄土双六を図像的に見た場合、絵解きとの関連を指摘しうると筆者は考えている。浄土双六のマスに描かれている、特に地獄の情景を見ると、熊野観心十界曼陀羅に描かれている場面をモチーフにしているように思われるのである。浄土双六が日待・月待行事の際に遊ばれていた事は本論中ですでに述べたが、絵解きに使用された曼陀羅と図像的に類似しているということは、この双六が遊行僧などの仏教の布教者を介して普及していった可能性を示唆しているのではないだろうか。

浄土双六について、筆者が課題として残す部分はまだまだ多い。さらに視点を広げ、考察を深めたいと考えている。

［註］

(1) 拙稿「出世双六の変化―幕末から明治へ―」（『風俗』第三二巻第三号、日本風俗史学会、一九九四年）参照。

(2) 『日本風俗史講座』第八巻、雄山閣、一九二九年所収。

(3) ここで有馬が紹介している資料は、現在東京国立博物館が所蔵している「双六類聚」である。この資料については、後註(26)を参照。

(4) 小高吉三郎『日本の遊戯〔復刻版〕』拓石堂出版社、一九七六年、二九三頁～二九五頁。

(5) 増川宏一は「「證果増進之圖」論―初期絵双六に関する一考察―」（『遊戯史研究』第三号、遊戯史学会、一九九一年）で、こうした文字だけで構成された仏法双六が弘安年間に存在し、それが絵双六の原型となったとする従来の説に対し、疑問を投げかけている。この説の根拠となっているのは、『還魂紙料』にある「弘安中の或書に未学の僧を罵る詞に、名目双六も知らずやといふことありとぞ」という記述であるが、増川は「「或書」とはどのような文献とも明示されず、この引用文全体が甚だ不明確な表現である」のに、これを「無条件に容認している」この説は妥当なものではない、と指摘している。更に、従来文献上に「仏法双六」「名目双六」として登場する双六に当たるものとして紹介されてきた「證果増進之圖」の制作年代について考証し、「「證果増進之圖」がわが国で最古の双六かそれに準じたものとみなす」定説に疑問を提起している。しかし、絵双六の起源に関する増川の見解は述べられておらず、「今後の有力な資料の発掘により、おそらく試行錯誤を繰り返しながら徐々に真実に迫っていくことに期待したい」と、問題を提起したに留まっている。

(6) 『還魂紙料』（『日本随筆大成』第一期一二、吉川弘文館、一九七五年）二二九～三一頁。

(7) 高橋順二『日本絵双六集成』柏書房、一九八〇年。その他、小西四郎他編『伝統的な日本の遊び　双六』（徳間書店、一九七四年）、山本正勝『双六遊美』（芸艸堂、一九八八年）等が挙げられる。また、画集的なものではないが、多くの図版を掲載し、合わせて絵双六についてかなり詳細な論考を展開しているものとして、半澤敏郎『童遊文化史』（東京書籍、一九八〇年）も紹介しておく。

(8) 『御湯殿の上の日記　一』（『続群書類従・補遺三』続群書類従完成会、一九三二年）五九頁。『御湯殿の上の日記』は、内裏の御湯殿の上の間に奉仕する女官が代々記録した日記であり、文明九年（一四七七）から文政九年（一八二六）の間の記録が伝存している。宮中の公私にわたる年中行事や諸慣行、遊芸に関する記事が多く、当時の宮廷における日常生活を知る上で貴重な史料とされている。

(9) 同前、五九頁。

(10) 同前、四四三頁。

(11) 『言國卿記』第一（『史料纂集』〔第一期〕続群書類従完成会、一

九六九年）一三四頁。

(12) 『實隆公記』続群書類従完成会、一九三一年。

(13) 前掲『言國卿記』第一、一三六頁。

(14) 『江戸時代書林出版書籍目録集成』（井上書房、一九六二年）より作成。

書籍目録は、出版業の発展に伴い、寛文年間（一六六一～七二年）から享和年間（一八〇一～〇三年）にかけて出版業者によって刊行された出版物の目録である。大名の出版物や個人の私家版を除く、出版業者が販売を目的とした出版物を掲載しており、現在の出版年鑑や出版総目録といったものに相当する。

(15) ここに「懐中図」として挙げられている、浄土双六以外の「京　江戸　年代記　大坂　世界　近江八景　道中　日本」の八点は、同じ「掛物」の部に記載されている「京之図」「江戸図」「年代記」「大坂図」「世界図」「道中図」「日本図」の懐中図を指すものではないかと考えられる。ただし、「近江八景」に関しては、対応するものは見当たらず、懐中図としてのみ掲載されたようである。

(16) 『近世文学史料類従』古俳諧編（一六）、勉誠社、一九七二年、所収。

(17) 『近世文学史料類従』古俳諧編（一四）、勉誠社、一九七二年、所収。

(18) 『諸艶大鑑』巻二（『定本西鶴全集』第一巻、中央公論社、一九五一年）二九一頁。

(19) 尾崎久彌『吉原圖會』竹酔書房、一九三一年、一八～九頁参照。

(20) 緒言に「元文寛保延享の比、世中の有様見覚え聞伝へたる有増を書侍る」とある『享保延享　江府風俗志』（『続日本随筆大成』別巻近世風俗見聞集八、吉川弘文館、一九八三年、三頁）には、正月の風景を描いた次のような記述がある。

扨年季小供職人弟子抔の下ざまの遊びには、穴一抔する、是も師匠親方、松之内は大凡ゆるす心也、又道中双六、福人双六抔とて売歩行、娘子供は羽ねつき、手まり、針うち抔して遊びたわむれる

ここに描かれている双六の歩き売りは、『手前勝手御存商賣物』〔山東京伝作　天明二年（一七八二）〕・『四時交加』〔山東京伝作　寛政九年（一七九八）〕・『守貞漫稿』〔喜田川季荘著　天保八～嘉永六年（一八三七～五三）〕といった文献にも紹介されており、正月の都市の風物として定着していたようである。

また、文化・文政期に屋代弘賢から日本各地に向けて出された「諸国風俗問状」とそれに対する返答書（『日本庶民生活史料集成』第九巻、三一書房、一九六九年）から、道中双六が正月の子供の室内遊戯として、三都に限らず広く普及していたことを知ることができる。

(21) 『日次紀事』（『日本庶民生活史料集成』第二十三巻、三一書房、一九八一年）二五頁。

(22) 「百味の夜食浄土双六」（『滑稽文学全集』第十一巻、文芸書院、一九一九年）一一九～二〇頁。

(23) 日待・月待行事に関する研究は、民俗学の分野を中心に行われており、特に柳田国男の研究によるところが大きい。日待・月待行事は共に日本古来の信仰の形態を示すものであり、人々が神と共食するという祭りの本源的な姿をとどめたマチ事から変化したもの、とする民俗学側の定説に対し、飯田道夫は日待・月待行事は仏教思想に基づく仏事であったとの説を展開している（飯田道夫『日待・月待・庚申待』人文書院、一九九一年）。

しかし、民俗学側も日待・月待行事と仏教との関連性をまったく否定しているわけではなく、日待・月待行事が遊行僧らによって布教活動の場として利用された可能性を指摘している（柳田国男「二十三夜塔」『定本柳田国男集』十三巻、筑摩書房、一九六九年）。いずれの説も、日待・月待行事と仏教が何らかの関連性を持っていたことを指摘しており、このことは、仏教教義を題材とする浄土双六が日待・月待行事の場で遊ばれていた事実を考えあわせた場合、浄土双六の普及の過程を知る上で、一つの手掛かりとなりうるのではないかと思われる。

(24) 元禄四年（一七〇一）に成立した『桃源遺事』（『続々群書類従』第三、国書刊行会、一九〇六年、三六八頁）によると、徳川光圀は「世俗の月待日待と云は、瞽女座頭をよび遊興を催し、或は博奕等仕り候よし、非禮至極に覺し召候に付、月待日待無用と致すべし」と述べており、江戸時代の前期には日待・月待行事が遊興の場となっていたことを示している。

尚、江戸時代の庶民層における日待・月待行事の実態に関しては、飯田道夫前掲書を参照。

(25) 『異説まちまち』（『日本随筆大成』第一期十七、吉川弘文館、一九七六年）一二九頁。

(26) 「双六類聚」は、総点数七〇点の絵双六を貼り込み、帖に仕立てたもので、たて四三・四cm、よこ三〇・八cm、厚さ四・六cmとかなり大きな折帖である。本資料には、仮名垣魯文による次のような跋文が添えられている。

雙六盤の木肌太きは持運びの便ならずとて、紙に摸しものせしより中興、これに絵を加へ、様々の種類も出来て、刊行の物世に多く、双六の名は盤上の厚きより紙面の薄きに奪はれ、あら玉の年立返る旦、貴賤の童子これを翫ばぬはなく、然ば往時小学の盛んならぬ頃、仏法浄土雙六の図に未来を説き、官職補任双六の譜に現世を示し、嬉戯玩弄の中おのづから婦幼を諭し、雅童を導くの案内となしゝより、人生の道中雙六行廻り、二百年の昔を今にとし〳〵の新板、此種類の旧きを棄ず、青丹よしなら崎の若主人紙鬻ぐ家のよすが、此反古どもの世に散紊れたるを取集め、部類を分ちて一帙宛に製されしを、余一日勝海舟翁の許に携へて見参らしゝに、年経し反古の好事の手に斯く修復して蘇生りしは、故人柳亭が還魂紙の材料となれる物ぞと仰ありしをその侭後に記す　仏骨庵主仮名垣魯文述

この跋文から、①「紙鬻ぐ」ことを家業としている「なら崎の若主人」が古板の絵双六を蒐集・分類し、一帙にまとめたものであること、②魯文が勝海舟のもとを訪れ、この資料を見せたこと、③この資料について海舟は、柳亭種彦が『還魂紙料』を著すに際して参考としたものであろう、と評したことがわかる。この資料の冒頭には、海舟の筆になる讃が寄せられており、「丁亥」という干支から一八八七年（明治二十）に記されたものと考えられる。実際魯文がこの年海舟のもとを訪問していることは、「海舟日記」からも確認できる。

但し、この資料の由来等について、現在のところこの跋文以外手掛かりとなりうる資料はない。「なら崎の若主人」という人物も特定できず、いつ、誰によって蒐集されたものか判然としない。また、種彦の参考となった、という海舟の説も、根拠のあるものではなく、今後調査する必要があろう。

貼り込まれている七十点の絵双六には、制作年代・作者名等が明確でないものも多く含まれているが、形態的に見てほぼ年代順に配列されていると考えてよいであろう。中には、貞享～正徳年間（一六八四～一七一五）に活躍した石川流宣が描いた「諸商人雙六」が含まれており、筆者の知る限り作者を特定できる絵双六として一番古いものである。初期絵双六を研究する上で、大変貴重な資料であることは間違いなく、今後さらに分析を進め、別稿を用意したいと考えている。

尚、本資料の概略については、関忠夫『「雙六類聚」雑考』（『MUSEUM』二三〇号、東京国立博物館、一九七〇年）を参照。

(27) 石塚豊芥子（一七九九～一八六一）は、幕末期の雑学者で、本業としては神田豊島町で「芥子屋」という粉屋を営んでいた。一方、蔵書家としても有名であったようで、山東京伝、柳亭種彦らとの交流も深かったという。

(28) 『還魂紙料』前掲『日本随筆大成』第一期一二、二三〇頁。

尚、模写されている部分を、参考のため次に転載する。

(29) 『異説まちまち』前掲『日本随筆大成』第一期十七、一二九頁。

(30) 「百味の夜食浄土双六」前掲『滑稽文学全集』第十一巻、一一九頁。

せし浄土双六の図諸有。按るに元禄頃の刻本西村与八の浄土双六よりも此双六の画風少し古きやうなれハ、此双六元禄以前のものなるへし」とあり、この双六の制作年代を元禄以前と推定している。しかし、この双六に描かれている妖怪の絵が、安永五年（一七七六）に版行された鳥山石燕の『画図百鬼夜行』の絵と酷似していることから、安永五年以降に制作されたものと考えた方が妥当であろう。

（一九九五年三月脱稿）

(31) 『還魂紙料』前掲二二六頁。

(32) 『仏教文化事典』（佼成出版社、一九八九年）、定方晟『須弥山と極楽　仏教の宇宙観』（講談社、一九七三年）、参照。

(33) 山辺習学『地獄の話』（一九八一年　講談社）、七七～九二頁。尚、地獄に関する部分は、同書と定方の前掲書を主に参照した。

(34) 補処を、この双六のように「左補処」「右補処」と分けて言うことは、仏教教義においては行われないようである。この表現は、左右大臣のような官位の影響を受けたものではないだろうか。

(35) 東京都立中央図書館には、幕臣蜂屋惟清（惟園）が天保十四年（一八四三）にこの双六と同版のものを模写したもの所蔵されている。それに添付された惟清自身が記した付箋には、「柳亭か還魂紙料ニ載

〔別　表〕

NO.	書籍目録名	版元名	版行年代	西暦	項目名	記載事項
1	和漢書籍目録	不明	[寛文6頃]	1666	繪圖	浄土双六
2	増補書籍目録　作者付大意	江戸本町三丁目　西村又右衛門 京寺町誓願寺前　西村又左衛門	寛文10	1670	掛物	浄土双六
3	増補書籍目録	寺町通二條上ル町　山田市郎兵衛	寛文11	1671	掛物	浄土双六
4	古今書籍題林	洛下書齋　毛利文八	延宝3	1675	掛物	懐中圖　京　江戸　年代記　大教　世界 道中　日本　近江八景　浄土双六 浄土双六
5	新増書籍目録	江城下之書林	延宝3	1675	圖	浄土雙六 同中 同小之
6	新増書籍目録(延宝3刊の増補改編)		天和1	1681	圖	浄土雙六 同中 同小之
7	改正広益書籍目録	八尾市兵衛　吉野屋次良兵衛 坂上勝兵衛　西村市良右衛門	貞享2	1685	掛物	懐中圖　京　江戸　年代記　大教　世界 道中　日本　近江八景　浄土双六 浄土双六
8	広益書籍目録	永田調兵衛　西村市郎右衛門 坂上勝兵衛　八尾市兵衛	元禄5	1692	掛物並圖	浄土双六 同懐中 同道中双六 同野良双六
9	増益書籍目録大全	河内屋利兵衛	元禄9	1696	圖	浄土雙六 同懐中 道中雙六 冶郎双六
10	新版増補書籍目録　作者付太意	永田調兵衛　西村市良右衛門 八尾市兵衛	元禄12	1699	掛物	浄土双六
11	増益書籍目録大全 (元禄9刊の増補改訂)	丸屋源兵衛	宝永6	1709	圖	浄土雙六 同懐中 道中雙六 冶郎双六
12	増益書籍目録大全 (元禄9刊の増補改訂)	丸屋源兵衛	正徳5	1715	圖	浄土雙六 同懐中 道中雙六 冶郎双六